

な か

那珂 69

— 那珂遺跡群139次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1231集

2 0 1 4

福岡市教育委員会

な か

那珂 69

— 那珂遺跡群139次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1231集



調査番号 1217

遺跡記号 NAK-139

2014

福岡市教育委員会

題字は、福岡市東区青葉在住の松下さゆり氏の揮毫による

序

二千年の昔から大陸文化の窓口として栄えた福岡市は、二十一世紀の今日もアジアに開かれた都市として、更なる発展を目指してさかんに都市開発が推し進められています。それに伴ってやむなく失われる埋蔵文化財については、将来にわたって記録を保存するための発掘調査をおこなっています。

本書は、福岡市博多区那珂1丁目で集合住宅が建設されるのに伴って実施した那珂遺跡群第139次調査の発掘調査報告書です。

今回の発掘調査では、弥生時代から古墳時代の竪穴住居や井戸などの集落遺構と甕棺墓や土壙墓などの墳墓および中世の大溝が発見されました。なかでも弥生時代から古墳時代の竪穴住居や土壙墓などは、那珂丘陵におけるこの時代の集落域と墳墓群の拡がりと消長を考える上で貴重な発見となりました。

本書は、これらの発掘調査の成果を収録したものです。本書が市民のみなさんに広く活用され、埋蔵文化財保護に対するご理解の一助になるとともに、学術研究に活用していただければ幸いです。

なお、発掘調査から整理報告までの間には、多くの方々のご指導とご協力をいただきました。記して心から感謝の意を表する次第であります。

平成26年3月24日

福岡市教育委員会

教育長 酒井 龍彦

.....れいげん.....

1. 本書は、福岡市教育委員会が集合住宅の建築に先立って、平成24（2012）年8月20日～10月16日までに福岡市博多区那珂1丁目333-1、333-2で緊急発掘調査した那珂遺跡第139次調査の発掘調査報告書である。
2. 本書に使用した方位はすべて磁北方位である。
3. 道構は、掘建柱建物をSB、堅穴住居をSC、井戸をSE、更棺墓をST、土壙墓をSR、土塙をSK、溝道構をSD、ピットはSPと記号化して呼称し、その後にすべての道構を通番して01からナンバーを付した。
4. 本書に掲載した道構の実測と製図は小林義彦が、遺物の実測と製図は小林と谷直子が作成した。
5. 本書に掲載した道構と遺物の写真は小林が撮影した。
6. 本書の編集は小林と谷直子が行った。執筆は小林が行ったが、61号井戸出土の福籠は谷が執筆した。
7. 本書に係わる遺物と記録類は一括して埋蔵文化財センターに保管している。

調査番号：1217	遺跡略号：NAK-139	分布地図番号：024-0085
調査地籍:福岡市博多区那珂1丁目333-1,333-2		
工事面積：390m ²	調査対象面積：390m ²	調査実施面積：414m ²
調査期間：2012年8月20日～10月16日		

本文目次

序	
I. はじめに	1
1. 発掘調査にいたるまで	1
2. 発掘調査の組織	1
3. 立地と歴史的環境	3
II. 調査の記録	7
1. 調査の概要	7
2. 弥生時代の調査	7
1) 壴穴住居	7
2) 掘立柱建物	13
3) 井戸	14
4) 墓棺墓	14
5) 土壙墓	16
6) 土壙	19
3. 古墳時代の調査	20
1) 壴穴住居	20
2) 土壙墓	26
3) 土壙	27
4) ピット	28
4. 中世の調査	28
1) 土壙墓	28
2) 溝	30
5. そのほかの遺構と包含層の遺物	31
III. おわりに	32

挿図目次

Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1 / 25,000)	2
Fig. 2 那珂遺跡群位置図 (1 / 8,000)	4
Fig. 3 那珂遺跡群第139次調査区位置図 (1 / 800)	5
Fig. 4 那珂遺跡群第139次調査区周辺現況図 (1 / 400)	6
Fig. 5 遺構配置図 (1 / 150)	8
Fig. 6 弥生時代の遺構配置図 (1 / 300)	9
Fig. 7 3号住居実測図 (1 / 40)	10
Fig. 8 4・5号住居実測図 (1 / 40)	11
Fig. 9 3・4・5号住居出土遺物実測図 (1 / 3・1 / 4・1 / 6)	12
Fig.10 63・64号住居実測図 (1 / 40)	13
Fig.11 101号建物実測図 (1 / 80)	14

Fig.12	8・61号井戸実測図(1/30)	15
Fig.13	61号井戸出土遺物略図(1/2)	16
Fig.14	1号壺棺墓実測図(1/10)	17
Fig.15	1号壺棺実測図(1/6)	17
Fig.16	6・7・66号土壤墓実測図(1/30)	18
Fig.17	50・65号土壤実測図(1/30)	19
Fig.18	古墳時代の遺構配置図(1/300)	20
Fig.19	2号住居実測図(1/40)	21
Fig.20	2号住居出土遺物実測図1(1/4)	22
Fig.21	2号住居出土遺物実測図2(1/4・1/6)	23
Fig.22	2号住居出土遺物実測図3(1/3・1/4)	24
Fig.23	53号土壤墓実測図(1/30)	26
Fig.24	53号土壤墓出土遺物実測図(1/2・1/4)	26
Fig.25	87号ピット実測図(1/10)	27
Fig.26	87号ピット出土遺物実測図(1/4)	27
Fig.27	中世の遺構配置図(1/300)	28
Fig.28	80・100号土壤墓・99号土壤実測図(1/30)	29
Fig.29	80・100号土壤墓・99号土壤出土遺物実測図(1/2・1/4)	30
Fig.30	62号溝土層断面実測図(1/30)	30
Fig.31	そのほかの遺構出土遺物実測図(1/1・1/3・1/4)	31

図版目次

- PL. 1 調査区全景（東から）
- PL. 2 1) 2・3号住居貼床断面（南から） 2) 4・5号住居（南から）
3) 4号住居（南から）
- PL. 3 1) 5号住居貼床断面（西から） 2) 5号住居遺物出土状況（西から）
3) 63・64号住居（北から）
- PL. 4 1) 8号井戸（南から） 2) 8号井戸南北断面（南から）
- PL. 5 1) 61号井戸（東から） 2) 61号井戸南北断面（東から）
- PL. 6 1) 1号壺棺墓（西から） 2) 1号壺棺墓挿入状況（南から）
3) 6号土壤墓（南から）
- PL. 7 1) 7号土壤墓（北から） 2) 53号土壤墓（東から）
3) 99号土壤・100号土壤墓（西から）
- PL. 8 1) 87号ピット（北から） 2) 62号溝（東から）
3) 62号溝東壁土層断面（西から）
- PL. 9 出土遺物1（縮尺不同）
- PL.10 出土遺物2（縮尺不同）
- PL.11 出土遺物3（縮尺不同）

I. はじめに

1. 発掘調査にいたるまで

那珂遺跡群は、福岡平野を北流する那珂川と御笠川に挟まれて長くのびる春日丘陵の北部に位置し、昭和40年代にはのどかな田園風景が広がっていた。しかし、急速に進む郊外の市街化で丘陵上は宅地化し、更には筑紫通りなどの整備によって建物の高層化が進んでいる。那珂1丁目周辺も、筑紫通りや竹下通りに面した利便性の高い地域で商業施設や高層化したマンションが建ち並び、昔日ののどかな田園風景は次第に失われつつある。

那珂遺跡群の立地する那珂丘陵は、春日丘陵から比恵へと延びる低丘陵の中の一支丘で、周辺の発掘調査例からその丘陵上には弥生時代や古墳時代、古代の遺構が濃密に広がっている。那珂1丁目は、この那珂丘陵の真っ只中にあり、近隣の調査例から遺構の存在が十分に予測された。この那珂1丁目333-1、333-2の地に集合住宅の建設が計画され、平成24（2012）年6月4日に、埋蔵文化財の有無に付いての照会が申請された。

これを受けて文化財部埋蔵文化財審査課事前審査係は、申請地が周知の埋蔵文化財の包蔵地であることから平成24（2012）年6月11日に試掘調査を実施した。その結果、申請地内には弥生時代や古墳時代の堅穴住居や柱穴が広がっていることが確認され、遺構の保全について申請者と協議した。

協議の結果、地下に眠る埋蔵文化財が基礎工事による破壊を免れないことから記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。この合意に基づいて申請者を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、平成24（2012）8月20日から発掘調査を実施し、翌平成25（2013）年度に資料整理と発掘調査報告書の作成を行うことになった。なお、事業の規模的事情から補助金適用要項に基づいて国庫補助事業と受託事業とを併せて行った。発掘調査は、平成24（2012）年8月20日からはじめ、10月16日に無事終了した。益明けの8月下旬から10月初旬は、猛暑と残暑の日々が続く暑い盛りにスコール的な雷雨が加わる時候で調査の進捗に支障が生じた。このような悪条件の中で、予定よりも早く発掘調査を終えることが出来たのは作業に従事した方々や関係者諸氏の協力に因るところが大きい。

2. 発掘調査の組織

調査主体 福岡市教育委員会

調査総括 文化財部埋蔵文化財調査課

埋蔵文化財調査課長 宮井善朗

埋蔵文化財調査課第1係長 常松幹雄

調査庶務 埋蔵文化財審査課管理係 横田 忍（現任） 古賀とも子（前任）

調査担当 埋蔵文化財調査課第1係 小林義彦

技能員 谷直子

調査・整理作業 廣瀬 恵（京都大学） 秋本君子 伊藤美伸 今井純江 今村ひろ子

浦崎てい子 岡村まどか 辛川容子 坂梨美紀 田中朋香 知花繁代 塚本よし子

遠山 熱 土斐崎孝子 西田文子 柚山恵子 濱フミコ 日高芳子 増田ヒロ子

松下さゆり 松下由希子 宮元亜希世 森田祐子 諸泉良子 渡部律子

発掘調査および資料整理にあたっては、常松幹雄・池崎譲二・山口譲治氏（福岡市埋蔵文化財調査課）から貴重な指導と助言を頂いた。改めて謝意を表します。

なお文化財部は、組織改編のため平成24年4月1日付で教育委員会から経済観光文化局に移管した。

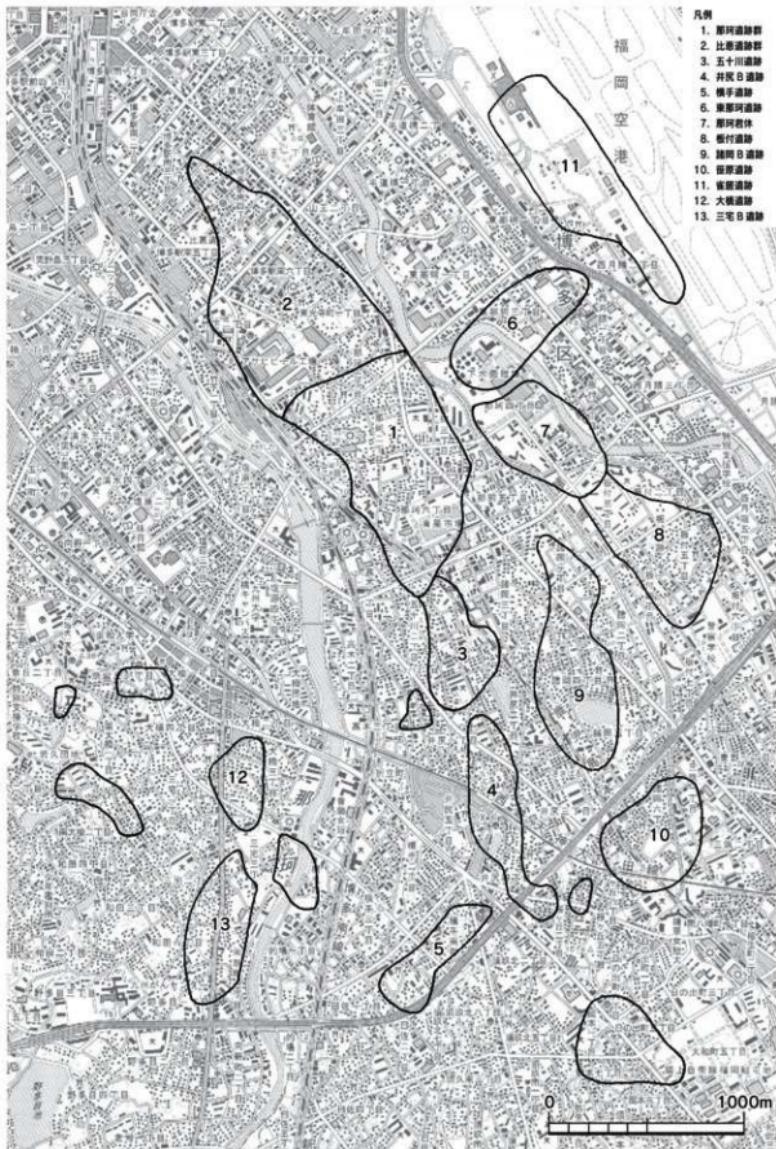


Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1 / 25,000)

3. 立地と歴史的環境

那珂遺跡群のある福岡平野は、三方を三郡山系や背振山系からのびる小山塊に囲まれ、北は玄界灘に向かって開口する博多湾に面した沖積平野である。この福岡平野には那珂川と御笠川が北流して博多湾に注ぎ込み、その両川の間には春日丘陵から断続的に長くのびる洪積台地が形成されている。春日丘陵と総称されるこの洪積台地は、花崗岩風化礫層を基盤とし、その上層には阿蘇山の火砕流による八女粘土層と鳥栖ローム層が堆積している。この春日丘陵は、奴国王の王墓地とされる須玖岡本から井尻、五十川を経て那珂、比恵へと続いて博多湾の海岸砂丘に北面しており、それらの丘陵上には、後期旧石器時代から中世にかけての遺跡が連続と複合的に展開している。殊に、弥生時代から古代にかけては濃密な分布状況を示している。

那珂遺跡群は、この春日丘陵の北端に位置し、比恵遺跡群と連続して同じ丘陵上に立地しているが、浅い鞍部を境として便宜的に北半部を比恵遺跡群、南半部を那珂遺跡群と呼称している。第139次調査区は、この那珂遺跡群の中央部の東縁に位置し、東側を蛇行しながら北へ流れを変える御笠川に向かって緩やかに傾斜してゆくその途上に立地している。また、その周辺域には御笠川の開析による細長い谷が東から幾筋も弯入し、その東南辺に拡がる低地には那珂深ラサ遺跡や那珂君休遺跡などの低湿地遺跡が立地している。

那珂・比恵遺跡群では、1938（昭和13）年の区画整理時に発見された環濠集落の調査以来、これまでに300カ所に達する地点で発掘調査が実施され、台地上において連続と営まれた各時代の集落や墳墓地の様相が次第に明らかになりつつある。ここで那珂遺跡群を概観すると、丘陵の南東縁（38・41次調査区）で、ナイフ形石器や彫器、剥片などの旧石器時代の遺物が出土しているが、散発的な分布を示すにすぎない。

次に来る繩文時代も早期から晩期前半までは、石器や石匙、土器片などが断片的に出土しているが、遺構に伴った明確なものはなく、その在り様は前時代と大差はない。この傾向は、比恵遺跡群においても同様である。

弥生時代になると、台地の縁辺部で堅穴住居や貯蔵穴群などの遺構が広がり、開析谷に面した緩斜面には土器や石器、木器を伴う包含層が形成される。集落域は尾根上へと次第に拡大していく。台地の南西縁（37次調査区）に夜白期から前期前半の二重環濠集落が営まれる。また、中央部の尾根上（67次調査区）でも貯蔵穴群を伴った環濠集落が営まれ、北西縁のアサヒビル工場内や東縁部にも貯蔵穴群が拡っている。前期後半から中期になると集落域は、縁辺部から尾根上へと次第に拡大していく。比恵遺跡群も同様で集落域の拡大傾向が見られる。

中期後半から後期には、那珂・比恵遺跡群とも台地上には、堅穴住居や井戸を伴う集落域が全城に亘って拡がり、その中には銅剣や銅矛など銅製品の鋳型や中子、埴輪など青銅器を生産を示唆する遺物も出土しており、青銅製品の生産に携わる工人集団の工房群が台地の尾根上に存在したことが窺われる。また、集落域の周辺には墳丘墓をはじめとする甕棺墓群も造営され、遺跡の性格も拡大・多様化する。比恵遺跡群の中央部に位置する6次調査区では、細形銅剣を副葬する甕棺墓を埋葬した墳丘墓も出現し、遺物も銅製錆先や鍛造鉄斧などの金属器や各種木製農工具、建築材、漆製品など多種多様なものが出土している。

古墳時代になると、台地の中央部に福岡平野で最古期の前方後円墳である全長が85mの那珂八幡古墳が造営され、その木棺内からは副葬された三角縁神獸鏡や玉類が出土している。これに続いて6世紀後半には、那珂八幡古墳周辺の台地上に東光寺劍塚古墳と劍塚北古墳の2基の前方後円墳のほか前方後方墳が造営される。このうち、東光寺劍塚古墳は、全長が140mで三重の周溝をもつ筑前地域で最大級の前方後円墳である。この時期の集落は、那珂から比恵の台地

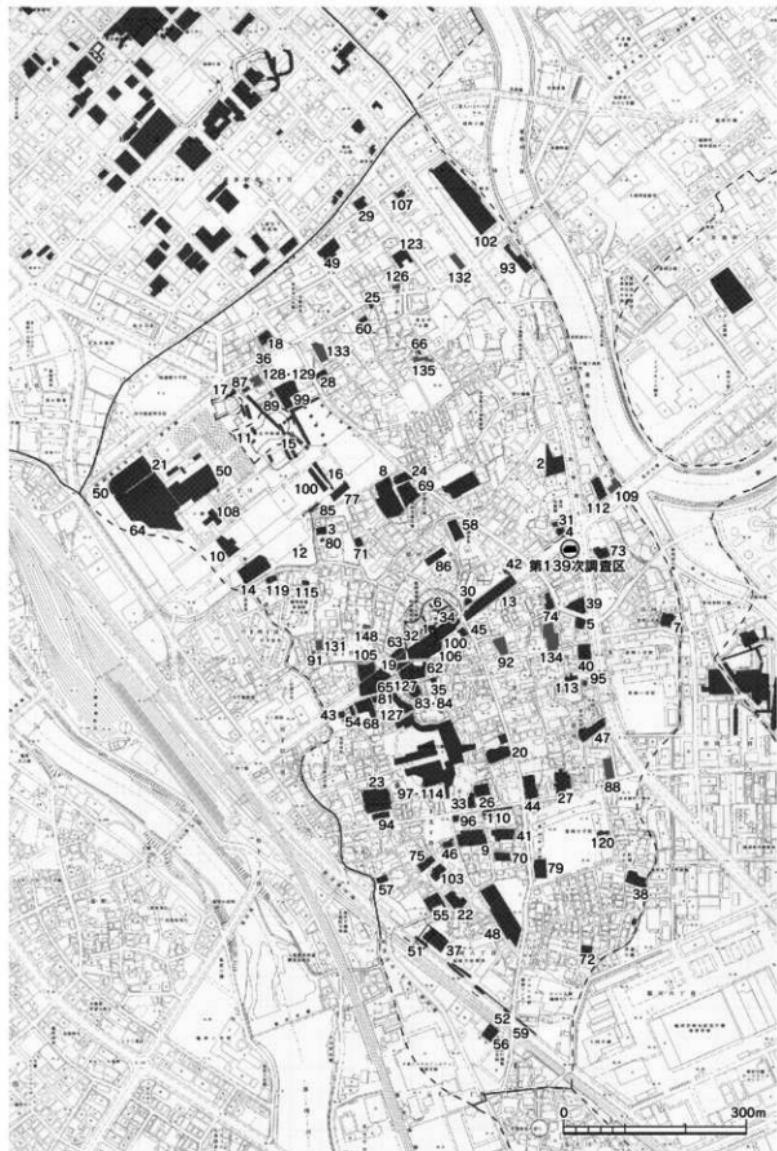


Fig. 2 那珂遺跡群位置図 (1 / 8,000)

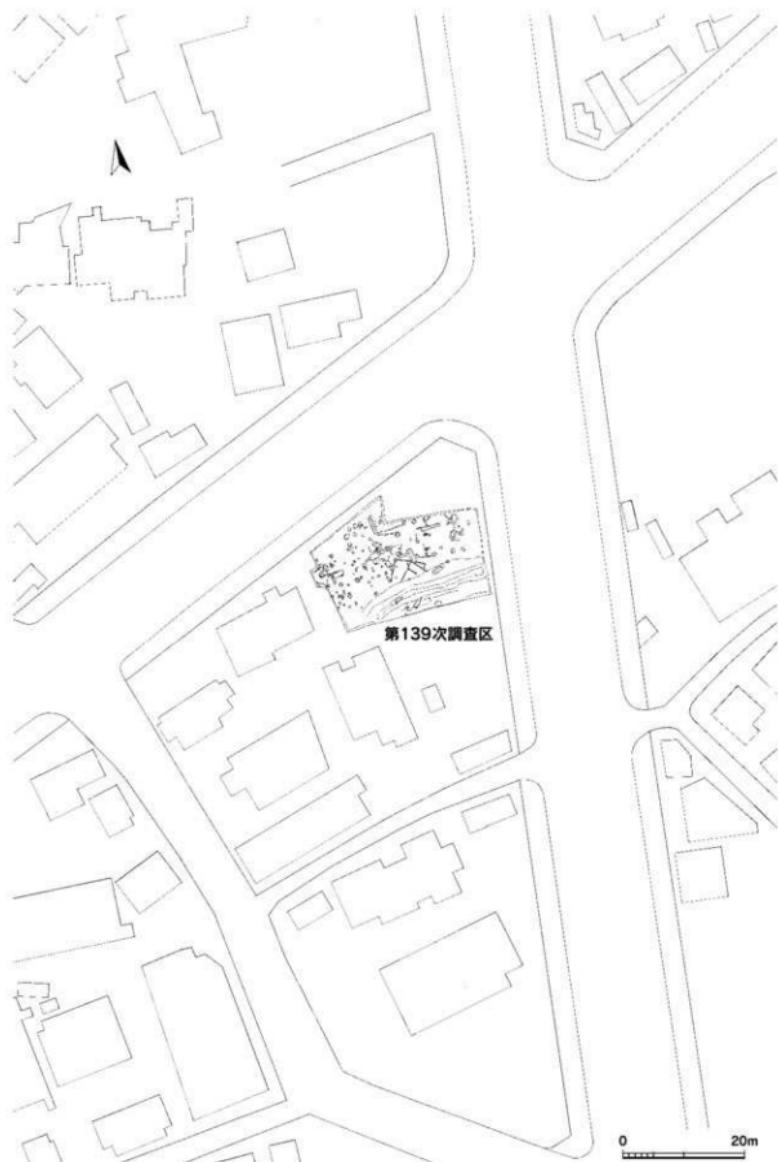


Fig.3 那珂遺跡群第139次調査区位置図 (1/800)

上に広く展開する。また、規格性の高い3本柱の柵列に囲まれた大型建物群も台地上の各所に出現する。殊に、紀記に記された「那津官家」とされる大型建物群が、比恵遺跡北西部（8次・72次、109次調査区）にあり、中央部（7・13調査区）にも南に巨大な門を配した3柱の柵列群や大型建物群が抜がっており、全体として「那津官家」を形成していたと考えられ、平野内の拠点的な集落として一翼を担っていたことが想起される。

古代には、台地の中央部に正方位の溝や大型建物、井戸などのはかに百濟系軒丸瓦や平瓦が出土しており、「那津官家」の後身とされる「那珂郡衙」などの官衙的な施設や寺院が展開していたと推考される。更に、続く中世には、台地上に溝で区画した居館遺構が存在し、この時期まで平野内において中心的な役割を担っていたものと考えられる。

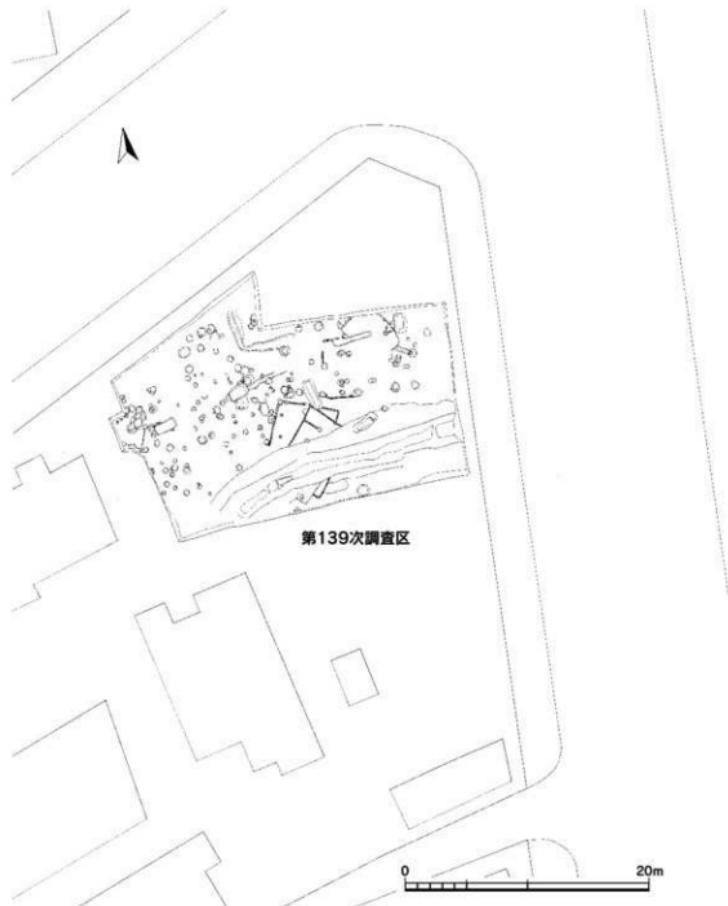


Fig.4 那珂遺跡群第139次調査区周辺現況図 (1 / 400)

II. 調査の記録

1. 調査の概要

那珂遺跡は、春日市の須玖岡本から井尻を経て那珂、比恵へと北へのびる標高が10m余の洪積台地の北部に位置し、東西が700m、南北が2,000mの範囲に亘って拡がっている。この那珂丘陵は本来的には11~12m余の丘陵で、その尾根上には那珂八幡古墳や東光寺剣塚古墳などの前方後円墳が立地し、その周辺には弥生時代の甕棺墓や土壙墓などの墳墓域と竪穴住居や貯蔵穴群などの集落群をはじめ、古墳時代や古代の遺構群が広く複合的に展開している。

第139次調査区は、この那珂遺跡の中央部の東寄りに位置し、周辺域には御笠川と諸岡川の浸食による開析谷が湾入して古代には水田域が拡がっていた。竹下通りを挟んだ北の第4・31次調査区では、弥生時代前期の甕棺墓や土壙墓と古墳時代後期の住居群が検出されている。また、筑紫通りの東に位置する第73次調査区では、古墳時代の竪穴住居や古代から中世の井戸が検出されている。試掘調査では、盛土下40~50cmで鳥栖ローム層に掘り込まれた弥生時代後期の竪穴住居を検出し、同期の遺構の拡がりが予測された。

発掘調査は、平成24(2012)年8月20日に調査機材の搬入とパワーショベルによる表土層の除去作業から開始した。層厚が40cmの表土層を除去すると基盤層の鳥栖ローム層を検出し、竪穴住居や甕棺墓、土壙墓などが拡がっているほかに調査区の南縁に沿って幅広の溝が伸びていることが明らかになった。殊に、調査区北東隅の竪穴住居からは壺や甕、鉢などが折り重なるように検出された。しかしながら、調査区は中世以降の開削や戦時の防空壕などによる搅乱坑で旧地形は大きく改変され、竪穴住居はわずかな高さの壁面を残して床面直上まで削平されていた。一方で、深い井戸や土壙墓、大溝(壕)、建物の柱穴などは比較的良好に残っていた。竪穴住居や甕棺墓の遺存状況からすると地山面は少なくとも50~80cmは削平されているものと考えられる。遺構の実測は、調査区の長辺に沿って任意に設定した主軸ラインを基準に10mの方眼を組み、その中に2mのメッシュを組み込み、北から南へa~k、東から西へ1~15とした。東西ラインは、磁北から87°28'西偏している。検出した主な遺構は、竪穴住居6棟、掘建柱建物1棟+a、井戸2基、土壙墓6基、土壙3基+a、溝4条と柱痕跡を残す柱穴で、これらの遺構は、弥生時代中期末~後期と古墳時代初め~中期および中世の3時期に大別される。このような多数の遺構を検出して同年10月16日に無事終了した。

2. 弥生時代の調査

弥生時代の遺構としては、竪穴住居5棟と掘立柱建物1棟、井戸2基、甕棺墓1基、土壙墓3基、土壙2基を検出した。分布的には、調査区全域に亘って拡がっている。このうち竪穴住居は、調査区の中央部に密集して拡がっており、時差的には4期に亘って建て替えがあったと推考される。掘立柱建物は、この竪穴住居の西に付随するようやや離れてある。一方、甕棺墓や土壙墓などの墳墓は、検出数も少なく、散漫に拡がる傾向がある。

1) 竪穴住居 (SC)

3号住居 SC-03 (Fig. 7・9 PL. 2)

3号住居は、調査区の北東部に位置する住居で、全体に削平が著しく貼床面と壁下の周溝を残して消失している。四周壁は2号住居や98号溝、87号柱穴等に切られている。また、東壁の中央部では1号甕棺墓と重複しているが、その先後は判然としない。平面形は、東西長が570cm、南北長が475cmの方形プランを呈する。壁下には幅が8~12cm、深さが5~8cmの周

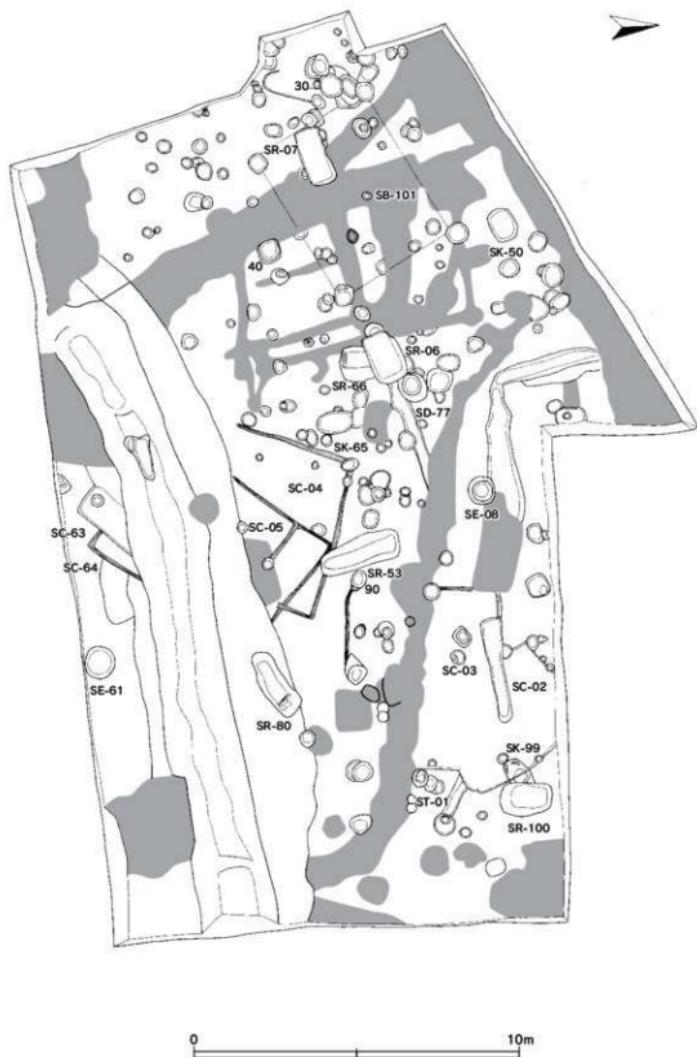


Fig. 5 遺構配置図 (1 / 150)

溝が巡る。床面は、掘り方上に厚さが6~10cmの黄褐色粘土ブロックを敷き堅めて貼床としている。主柱穴は、南北壁から110~120cm、東西壁から160cmのところに柱痕跡を残す径が50~60cm、深さが30~35cmの円~楕円形プランの柱穴が4本ある。遺物は、弥生土器甕片や丸底壺片が床面上から出土したが、量的には少ない。

1は、口径が19cmの土師器甕である。口縁部は、「く」字状に外反する。胎土は緻密で小~中砂粒をわずかに含み、色調は橙色。2号住居の混入遺物である。

4号住居 SC-04 (Fig. 8・9 PL. 2・9)

4号住居は、調査区の中央部に位置し、東壁は、5号住居の西半部と重複し、それよりも新しく、北壁の一部は53号土塙墓に削平されている。また、南壁側は62号溝に削平されて消失しているが、北壁が500cm、西壁が400cmあり、平面形は、一辺が500cmほどの方形プランをなそう。壁面は垂直に立ち上がり、壁高は23cmで壁下には幅が7~10cm、深さが5~12cmの周溝を巡らせている。掘り方面上には、黄褐色粘土ブロックを3~7cmの厚さに堅く敷き詰めて貼床面を作っている。明確な主柱穴は確認できなかった。遺物は、弥生土器の壺や甕、高坏片のはかに壺型のミニチュア土器と石庖丁片が出土した。

2は、口径が7.2cm、器高が7.6cmの小型丸底壺である。口縁部は、短く外反し、端部は上方に小さく摘み上げている。体部は、玉葱状の偏球形をなす。調整は、体部は押圧ナデ、口縁部はヨコナデで外面には暗文状の工具痕がある。胎土は緻密で、少量の小砂粒と雲母片を含み、焼成は良好。色調は茶褐色~黒褐色。3は、土師器の器台で天井部には円孔を穿っている。天井部はナデ、内面はハケ目後に粗いナデ、外面はナメ方向の叩き調整。胎土には小~中砂粒を含み、色調は灰白色。いずれも混入遺物と考えられる。4は頁岩質の石庖丁片である。背厚は3.5mmで、背に沿って2孔の紐通し孔を穿っているが、孔間が7mmと狭い。刃部はシャープに研ぎ込まれている。

5号住居 SC-05

(Fig. 8・9 PL. 2・3・9)

5号住居は、調査区のほぼ中央部に北壁と西壁の一部を残して位置する住居で、東壁から南壁は62号溝によって大きく削平されている。また、西半部は4号住居と重複し、周溝と床面を除いて消失している。壁面は北壁が300cm、西壁が365cmほど残っていることに加えて北壁から120cm、西壁から160cmのところに15cm径の柱痕跡を残す柱穴があり、主柱穴の1本と考えられる。このことから平面形は、一辺が520~550cmの方形プランが復原され、4本柱の住居と考えられる。北壁側には、幅が110cmのベッド状遺構が付設されている。このベッド状遺構は、床面の掘り方より6~8cm高く段を付けて掘り、その上に黄褐色粘土ブロックを数cmのほど堅く敷き詰めて床面を作っている。床面の貼床面は、ベ

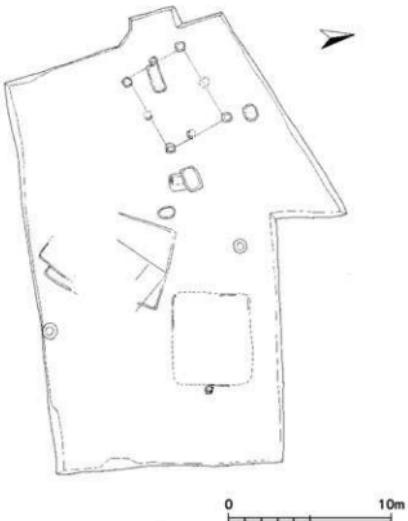


Fig. 6 弥生時代の遺構配置図 (1 / 300)

ツド状遺構下の一部で確認されたが、大半は削平を受けている。また、四周壁下とベッド状遺の壁下には、幅が5~6cm、深さが5~8cmの周溝が巡っている。遺物は、弥生土器甕片や黒曜石片が出土した。

5・6は、鉢である。5は口径が15cm、器高が5.8cm。体部は半球形をなし、口縁部はストレートに外反する。調整は指頭押圧ナデ。胎土は、微細~石英中砂粒と雲母微細粒含む。淡明黄橙色。6は、口径が12.8cm。口縁部は、扁平な半球形の胴部から緩やかに内傾して立ち上がる。胎土には微細~小砂粒のほかに雲母微細をわずかに含み、焼成は良好。色調は、くすんだ

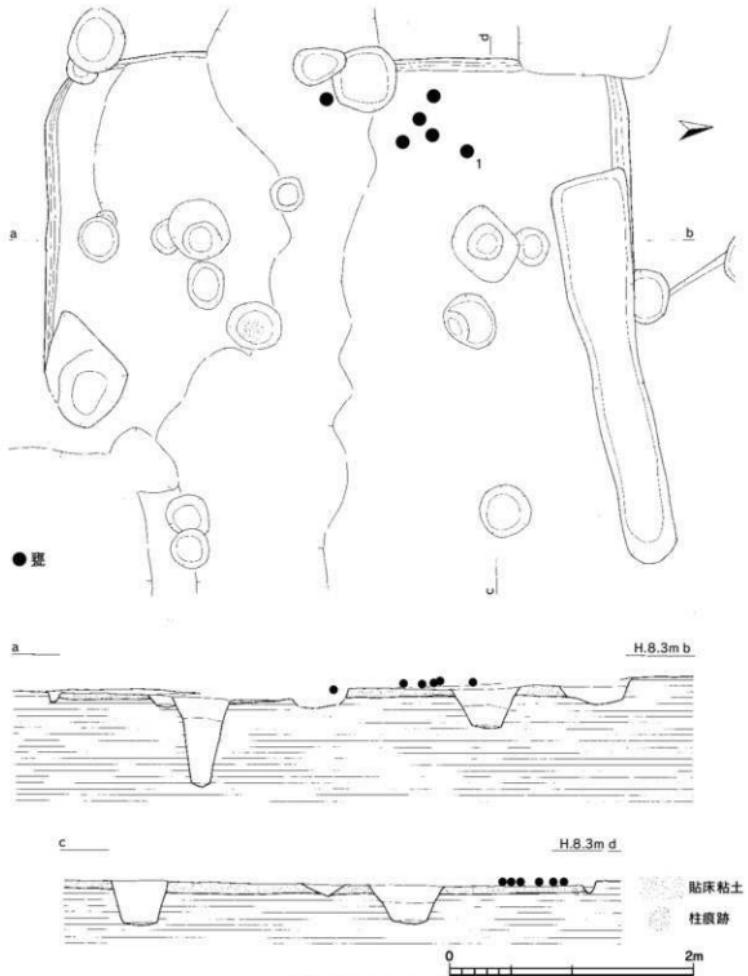


Fig. 7 3号住居実測図 (1 / 40)

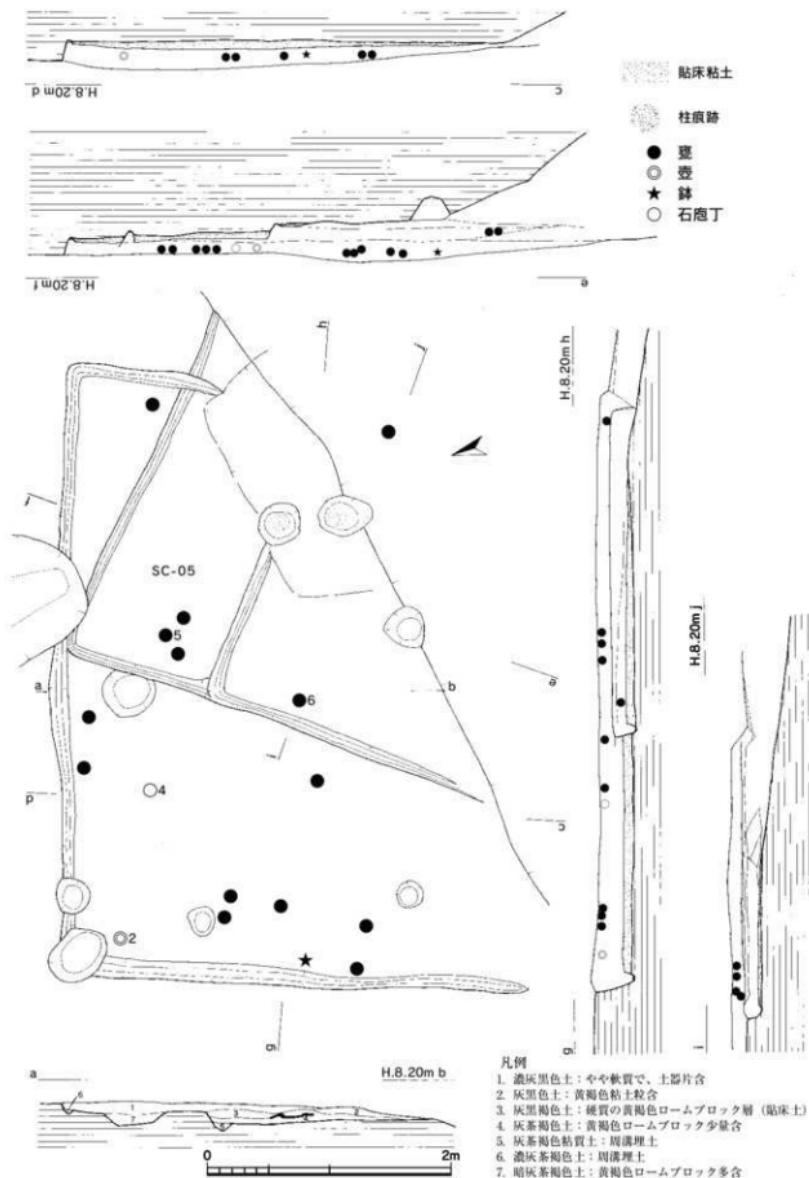


Fig. 8 4・5号住居実測図 (1 / 40)

淡黄褐色。7は、口径が27.1cm、底径が5.8cm、器高が38.9cmの壺である。「く」字状の口縁部は緩やかに外反し、胴部は長胴の倒卵形をなす。調整は、口縁部内面がヨコナデ、外面はナデ後に粗いタテハケ目。胴部は内外面とも粗いハケ目。内底面は指頭押圧ナデ、外底面はナデ。胎土は粗く、細～粗砂粒を多く含む。外面はくすんだ淡黄灰色、内面は淡明赤橙色。

63号住居 SC-63 (Fig. 10 PL. 3)

63号住居は、調査区中央部の南壁際に位置し、北から西壁は62号溝と搅乱坑の削平を受けて消失している。また、東壁は、64号住居の西壁を大きく削平して掘り込まれている。南東隅壁際には、南壁から30cm、東壁から60cmのところに直径が13cmの柱痕跡を残した深さが22～25cmの柱穴があり、4本の主柱穴のひとつであろう。平面形は、350cm～400cmの方形プランに復原される。床面は、壁下から8～10cmほど削平されており、原状を留めておらず貼床の有無は確認できなかった。壁面は、急峻に立ち上がり、壁高は20cmである。遺物は、弥生土器の壺片がわずかに出土した。

64号住居 SC-64 (Fig. 10 PL. 3)

64号住居は、調査区中央部の南端にあり、北壁と西壁は62号溝に因って削平されている。また、西壁は63号住居と重複しており、それよりも古い。平面形は、東壁の遺存長が200cm、南壁が140cmあり、一辺が350～400cmの方形プランに復原されよう。垂直に立ち上がる壁面の深さは30cmで、壁下には6～9cm幅の周溝が巡っており、南壁下の周溝は、63号住居の床面下に浅く遺存していた。床面は、掘り方に黄褐色粘土ブロックを3～5cmの厚さに堅く敷き詰めてフラット面を作り、貼床としている。柱穴は、検出できなかった。覆土は、暗茶～黒茶褐色土で、遺物は弥生土器片や土師器片がわずかに出土した。

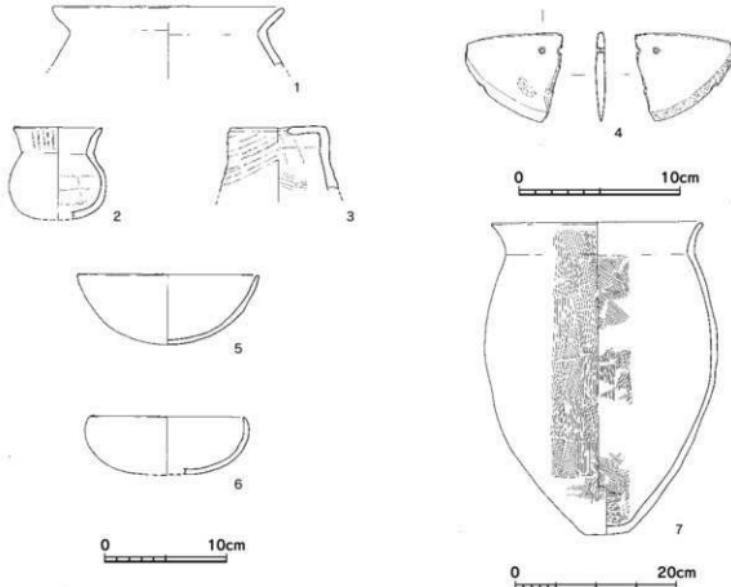


Fig. 9 3・4・5号住居出土遺物実測図 (1／3・1／4・1／6)

2) 掘立柱建物 (S B)

101号建物 SB-101 (Fig. 11)

101号建物は、調査区の西隅にある東西棟の2間×2間建物で、西梁柱の中柱は7号土壤墓に切られている。桁行長は、500cmで柱間は250cmの等間。梁行長は、400cmで柱間は200cmの等間であるが、東梁柱間は、160cmと240cmで東西の梁行に誤差があるが、P 2の北は搅乱坑内に柱穴があった可能性もある。柱穴は、一辺が45~60cm、深さは20~50cmのしっかりした方形プランを呈する。柱穴のうちP 6には柱材の押圧痕が残っていた。床面積は、20m²である。

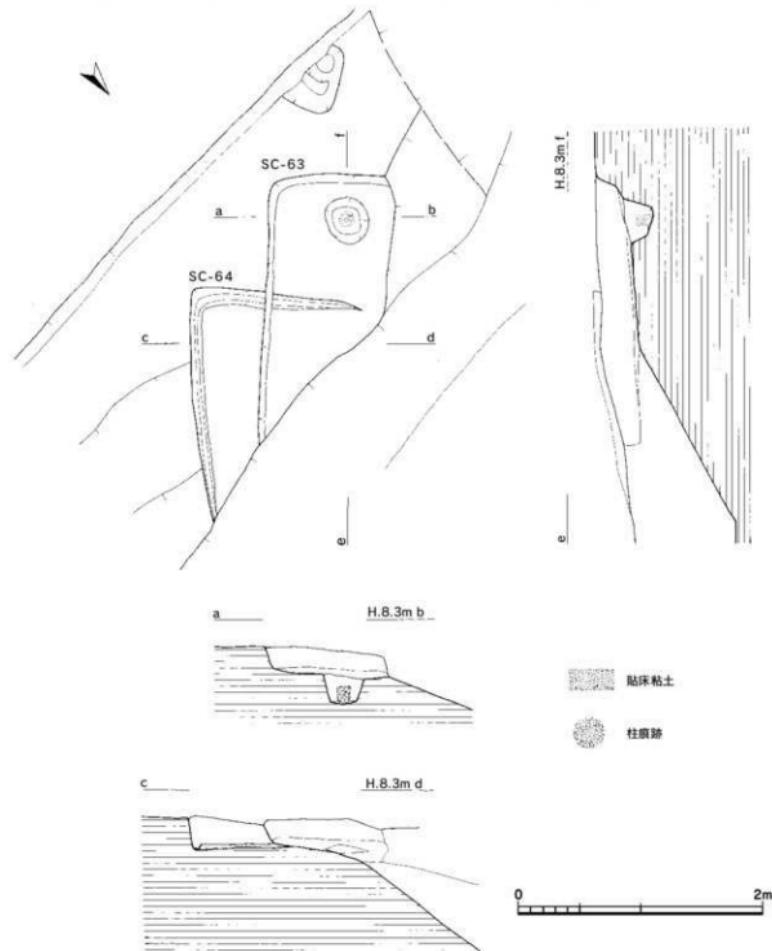


Fig.10 63・64号住居実測図 (1 / 40)

3) 井戸 (SE)

8号井戸 SE-08

(Fig. 12 PL. 4)

8号井戸は、調査区中央部の北端にある素掘りの井戸で、北側は54号溝に切られている。平面形は、直径が82cmの円形プランを呈する。壁面は、40cm径の底面に向かって垂直に窄まる。深さは343cmで、標高は4.67m。井戸底より35cmほどの高さに変換線があり、小さく袋状に膨らんでいる。また、井戸底より100cmの高さ、標高5.65mの地点で、基盤層が黄灰褐色粘土から灰褐色粘土へ変わり、ここから湧水が見られた。遺物は、弥生土器の甕や壺片がわずかに出土した。

61号井戸 SE-61 (Fig. 12・13 PL. 5・11)

61号井戸は、調査区の中央部南端に位置する素掘りの井戸で、62号溝の南岸にあり、西へ3mの距離には64号住居がある。平面形は、南北長が102cm、東西長が90cmの円形プランを呈する。壁面は、一旦-80cmほど窄まつた後に小さく袋状に膨らんで直径が40cmの井戸底に向かってストレートに窄まる。井戸底までの深さは367cm、標高は4.25mである。この小さく袋状に窄まつたところが鳥栖ローム層から八女粘土層へと移る地点であり、この八女粘土層のやや下の標高6.0m付近から湧水が観察された。12mほど離れた8号井戸よりも湧水点が若干高い。遺物は、井戸底から弥生土器片のはかに細い竹材で編んだ編籠が出土した。

8は、編籠である。体部のみで残存状態があまりよくないが、直径30cm前後、高さ15cm以上の鉢状か円筒形を呈していたと考えられる。ヨコ材の表面にフシ状の凸部が観察されることから、ヨコ材はタケ亜科の割裂き材と思われる、幅2.5~3.5mmである。タテ材は、タケ亜科の割裂き材の表皮を除いたものの可能性がある。材の幅が6~8mmとヨコ材より広い。編組技法はゴザ目編み(1本越え・1本潜り・1本送り)で、ヨコ材の間隔に対し、タテ材の間隔が広い。

4) 甕棺墓 (ST)

1号甕棺墓 ST-01 (Fig. 14・15 PL. 6・10)

1号甕棺墓は、調査区の北東部に位置する覆口式小児墓で、3号住居と重複しているが、その前後は判然とはしない。墓壙は、直径が50cmほどの斜坑を-52°の傾斜で掘り込み、その中に甕を挿入している。甕棺は、はじめに下甕を斜坑とほぼ同角の-51°の傾斜で挿入し、口縁部を打ち欠いた下甕の上に甕を覆い被せて上甕としている。甕棺は、下甕の胴部から上を墓壙に接するように埋置し、その隙間にローム粒混じりの暗茶褐色土を薄く充填して安定を図っている。下甕と上甕の接合面には、厚めの灰白色粘土を広く帯状に巻き込むように目貼りを施して密封している。一方、甕棺と墓壙奥には間は土砂を充填することなく、中空の状態をなして

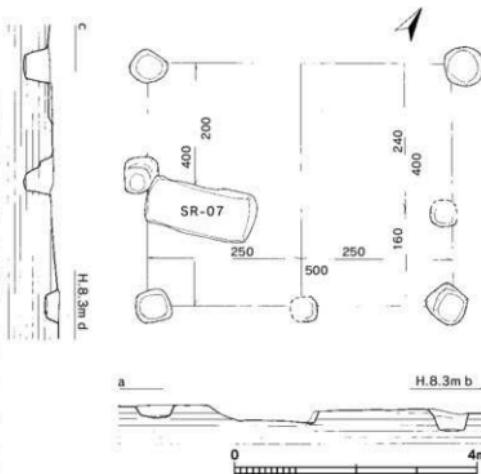


Fig.11 101号建物実測図 (1 / 80)

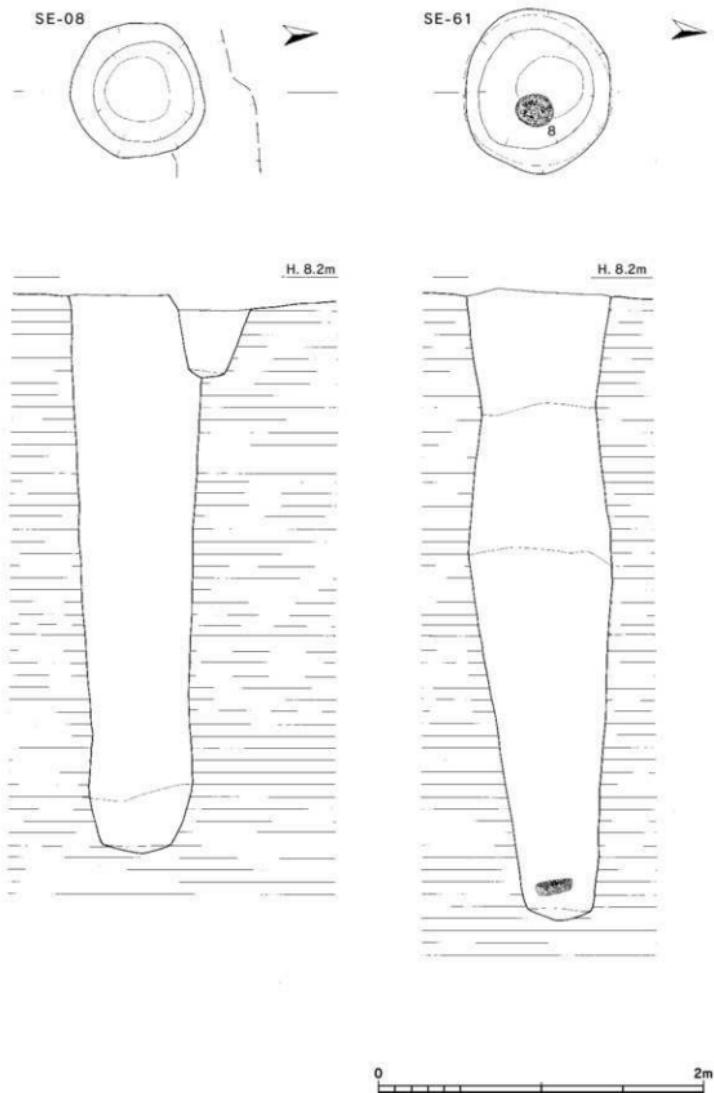


Fig.12 8・61号井戸実測図 (1 / 30)

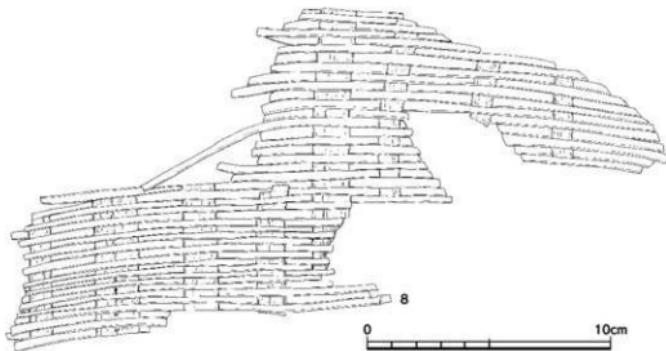


Fig.13 61号井戸出土遺物略測図（1／2）

おり、雨水で流れ込んだ弱粘質の灰茶褐色土が薄く堆積していた。主軸方位は、N-59.5°-W にとる。また、下壺内には、上壺と別個体の壺片が転落していたが、これが3号住居に伴うものがあるいは別の甕棺墓が住居の構築に際して混入したものなのかも明らかではない。

9は上壺で、口径が34.4cmの壺形土器である。口縁部は緩やかに外反し、内唇を小さく上方に摘み上げている。頸部には1条のコ字凸帯が巡り、倒卵形の胴部は欠失している。コ字凸帯には、左上から右下へ、更にその上に右上から左下へ「メ」字状に交差させた刻み目をヘラ工具で刻んでいる。胎土は粗く、細～石英中砂粒と雲母微細を含む。外面は明赤橙色、内面はくすんだ暗黄橙色。10は下壺で、現高が32.3cmの頸部から口縁部を打ち欠いた壺形土器である。頸部にはコ字凸帯が、倒卵形の胴部下半には△凸帯が1条巡っている。頸部下のコ字凸帯には、右上から左下へ斜め方向の刻み目をヘラ工具で刻んでいる。内外面とも目幅が1.5mmほどの粗いタテハケ目調整。胎土には微細～中砂粒を多く含む。外面は淡黄橙色、内面は化粧土の塗布によって明赤橙色。11は、口径が36cmの中型の壺形土器で、復原器高が43cmになろう。口縁部は大きく外反し、頸部と胴部下半には1条の扁平なコ字凸帯が巡っている。調整は、口縁部外面がヨコナデで胴部は押圧後に目幅が1.5～2 mmの粗いハケ目、内底面は指頭押圧後にナデ。胎土は粗く、多量の細～石英中砂粒のほか僅少の雲母微細と赤鉄鉱片を含む。色調は、淡明黄橙～淡黄橙色。

5) 土壙墓 (SR)

6号土壙墓 SR-06 (Fig. 16 PL. 6)

6号土壙墓は、調査区中央部のやや西寄りに位置する東西軸の土壙墓で、南側壁は66号土壙墓の北半部を切っている。平面形は、長軸が158cm、短軸が104cmの長方形プランを呈し、N-69°-Eに主軸方位をとる。壁面は、検出面から-20～30cmの位置に緩やかな屈曲線を作り、そこから壙底に向かって50cmほど垂直に掘り下げている。壙床は、四レンズ状に浅く窪み、箱形の断面形をなす。西小口壁の両隅には深い溝状の抉り込みが隔壁に沿って縱に入る。これは板材の打設に起因すると考えられ、木棺墓の可能性が想起される。覆土は暗茶～黒茶褐色土で、遺物は弥生土器壺片のほかに上層から土師器片や陶磁器片がわずかに出土した。

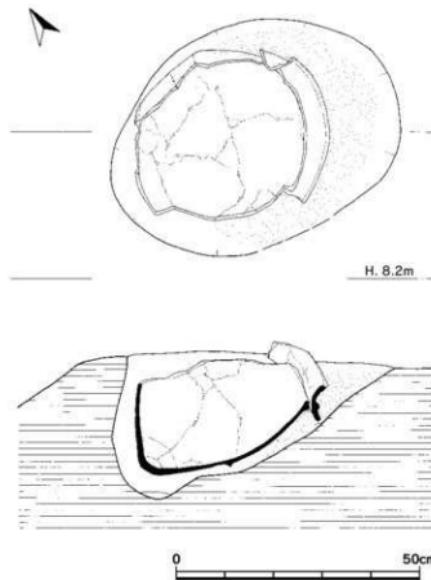


Fig.14 1号壺棺墓実測図 (1 / 10)

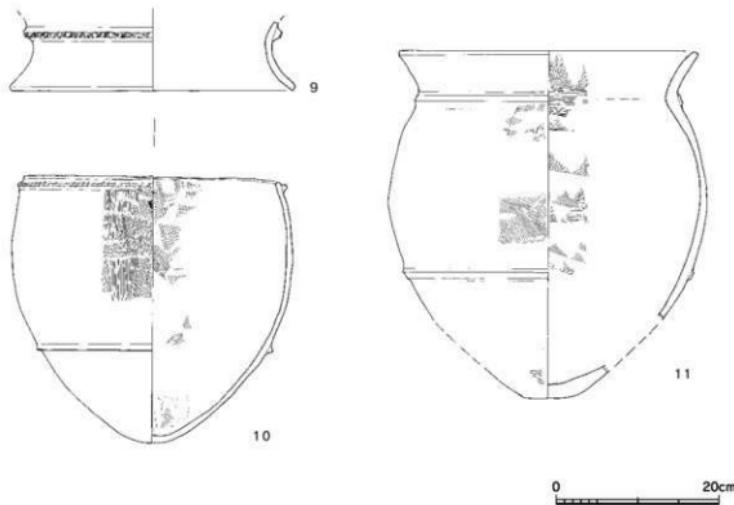


Fig.15 1号壺棺実測図 (1 / 6)

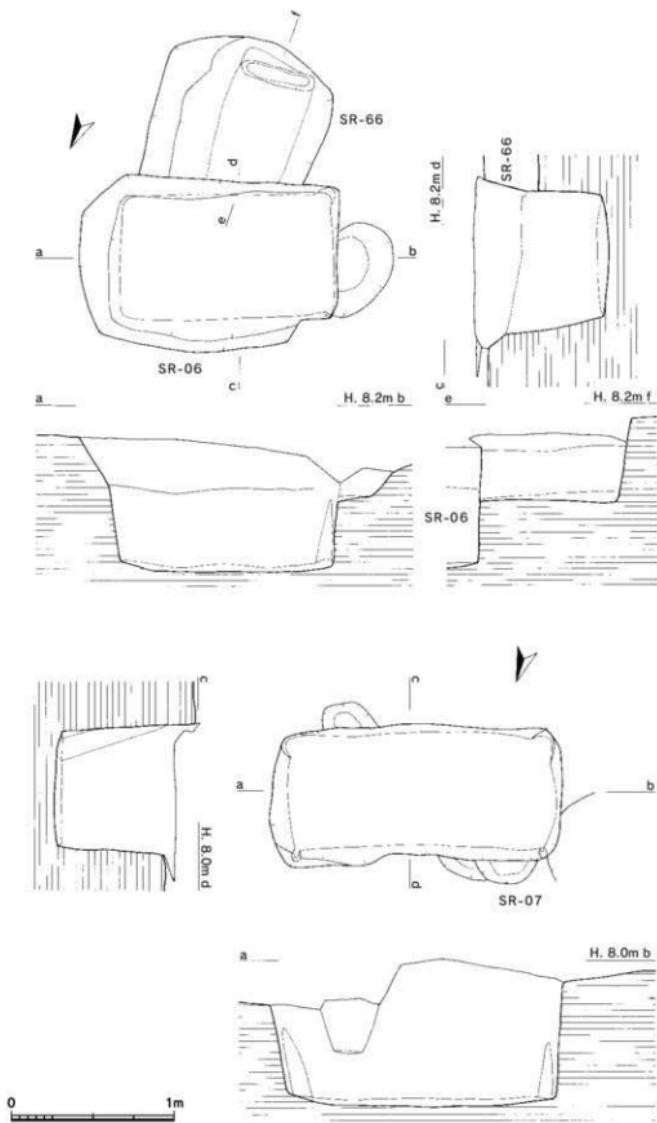


Fig.16 6・7・66号土壤墓実測図 (1/30)

7号土壙墓 SR-07 (Fig. 16 PL. 7)

7号土壙墓は、調査区の西端に位置する東西軸の土壙墓で、北東へ5mの距離には6号土壙墓がある。平面形は、長軸が178cm、短軸が84cmの長方形プランを呈し、N-75.5°-Eに主軸方位をとる。壁面は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は88cmを測る。墳床は、平坦で小口壁際が少し高くなる。断面形は、箱形をなす。小口壁の四隅には、側壁側に向かって縱方向に浅い溝状の抉り込みがある。この溝状の抉り込みは、板材の打設に起因すると推測され、木棺墓の可能性が想起される。本棺墓と仮定すると棺材の組合せは、西側は、小口板で側板を挟み込むが、東側の北側は小口板で側板を押さえ、南は側板で小口板を挟みタイプと考えられる。覆土は、黒茶褐色土の單一層で、遺物は、弥生土器片のほかに上層から土師器高环片や石錠片が出土した。

66号土壙墓 SR-66 (Fig. 16)

66号土壙墓は、調査区のやや西寄りに位置し、北小口壁側は6号土壙墓に因って削平されている。平面形は、短軸が100cmの長方形プランを呈し、長軸は150cmほどになろうか。主軸方位は、N-5°-E。壁面は、急峻に立ち上がるが、東側壁は検出面より10~15cmの位置に緩やかな屈曲線を作る。壁高は、52cm。短軸幅が45~49cmの墳床はフラットで、断面形は箱形をなしている。また、南小口の壁下には、やや東に振れた幅が10cmの浅い溝状の窪みがあり、小口板を打設した可能性が考えられる。この場合の棺材の組合せ法は、両側壁材で小口材を挟んだ木棺墓が想起される。覆土は黒色土の單一層で、遺物は、弥生土器片や黒曜石片がわずかに出土した。

6) 土 壙 (SK)

50号土壙 SK-50 (Fig. 17)

50号土壙は、調査区の北西部にある小土壙で、6号土壙墓から北西へ4mの距離に位置している。平面形は、長軸が115cm、短軸が80cmの隅丸長方形プランを呈する。主軸方位は、N-6°-W。壁面は緩やかに立ち上がり、逆台形の断面形をなす。削平が著しく壁高は23cmと浅い。墳底は、平坦であるが、北側壁側に向かってやや傾斜している。覆土は、黄褐色粘土ブロックを含む黒褐色土の單一層で、遺物は弥生土器片がわずかに出土した。

65号土壙 SK-65 (Fig. 17)

65号土壙は、調査区の中央部にあり、すぐ東には4号住居の西壁が隣接している。平面形は、長軸が110cm、短軸が65cmの隅丸長方形プランを呈し、N-95°-Wに主軸方位をとる。やや緩やかに立ち上がる壁面は、壁高が15cmを測る。浅い凹レンズ状をなす墳底は、南小口側に向かって緩やかに高くなり、断面形は逆台形をなしている。覆土は、黒褐色土の單一層で、弥生土器片がわずかに出土した。

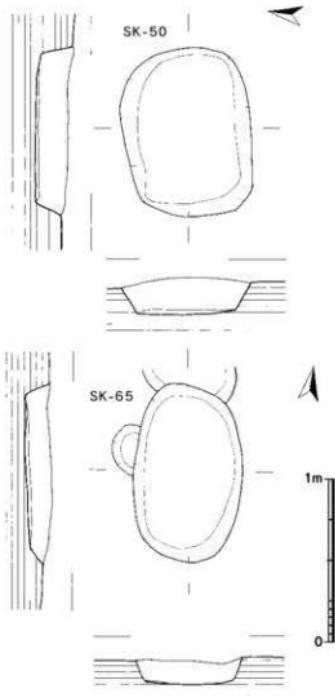


Fig.17 50・65号土壙実測図 (1 / 30)
50号土壙は、6号土壙墓から北西へ4mの距離に位置している。55号土壙は、4号住居の西壁が隣接している。

3. 古墳時代の調査

古墳時代の遺構は、堅穴住居1棟と土壙墓1基のほかに溝、土壙、柱穴を検出した。分布的には、調査区の北辺に偏る傾向が窺えなくもないが、分布する密度の稀薄さからその詳細な拡がりは把握しがたい。このうち堅穴住居は、壁面のすべてが削平され、規模的にも小さいが床面上には壺や甕、高坏などが折り重なるようにして密に並がっていた。土壙墓は、調査区の中央部に単独であり、その拡がりや墓域を構成するか否かは把握できない。また、時期的にも堅穴住居とは大きな時間差があり、時間的な連続性は稀薄である。

1) 堅穴住居 (SC)

2号住居 SC-02 (Fig. 19~22 PL. 2・9・10)

2号住居は、調査区の北東隅に位置する小型の住居で、東壁は99号土壙を切り、その東には100号土壙墓が99号土壙を切って接している。平面形は、南壁から西壁は3号住居と重複して消失しているが、南北長が397cm、東西長が370cmの長方形プランを呈する。壁面は、やや急峻に立ち上がる。壁高は、大きく削平を受けて5~8cmと浅く、周溝は巡っていない。掘り方は、中央部が浅く凹レンズ状に窪み、黄褐色粘土ブロックを敷き堅めた貼床は、壁下が2~3cm、中央部が6cmで全体をフラットに保っている。主柱穴は4本柱と考えられるが、北壁側は判然としない。遺物は、土師器甕や高坏、須恵器片と弥生土器の壺・甕・高坏片が混在して貼床上から出土した。

12~30は、甕である。12は、口径が17.8cm。「く」字状に外反し、上縁は緩やかに屈曲して垂直に摘み上げて二重口縁状をなしている。口縁部内面はヨコナデ、外面は叩き痕、胴部は内外ともナデ。胎土はやや粗く、小~粗砂粒と赤鉄鉱塊片を含む。赤橙褐色。13は、口径が17cm。口縁部は、「く」字状に大きく外反する。胎土はやや粗く、小~粗砂粒を多く含む。橙褐色。14は、口径が、23cmで、「く」字状の口縁部は、短く外反する。調整は、外面は粗いタテハケ目、内面は口縁部がヨコナデ、胴部は細かいハケ目。緻密な胎土には、砂粒と赤鉄鉱塊片を含む。橙褐色。15は、口径が25.6cm。口縁部は、「く」字状に外反し、胴部は倒卵形をなそう。口縁部はヨコナデ。胎土はやや粗く、小~中砂粒を含む。淡橙褐色。16は、口径が24.2cm。「く」字状の口縁部は大きく外反し、内唇を水平に仕上げている。調整は、口縁部がヨコナデ、胴部は、外面がハケ目、内面は押圧ナデ。胎土は粗く、小~粗砂粒を含む。赤橙褐色。17は、口径が25cm。「く」字状の口縁部は、緩やかに外反する。口縁部内面はヨコナデ、外面はハケ目後にナデ。胴部は内外面とともに押圧後に粗いハケ目。胎土は粗く、小砂粒を多く含む。黒褐色~黄橙褐色。18は、口径が24cm。口縁部は、「く」字状に外反し、端部は外唇を下方に丸く納め

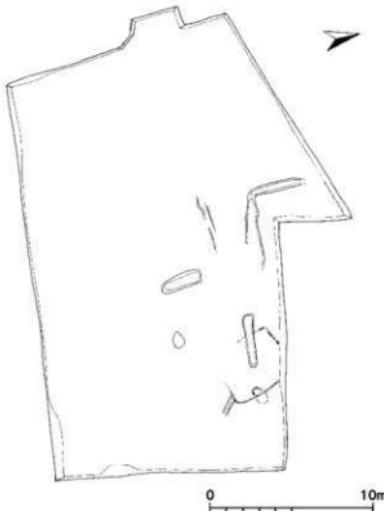


Fig.18 古墳時代の遺構配置図 (1 / 300)

ている。胸部は、倒卵形をなす。外面は、ナナメ～タテハケ目で口縁部はナデを加えている。内面は、押圧後にヨコハケ目調整。胎土は粗く、小砂粒を多く含み、黒～赤橙色。19は、口径が35cm。「く」字状の口縁部は、緩やかに外反し、口縁部下にはヘラ工具で線刻した1条の「コ」字凸帯が巡る。口縁部は、ハケ目後にヨコナデ、胸部内面は押圧ナデ、外面はタテハケ目調整。胎土は緻密で、小～中砂粒をわずかに含む。にぶい黄褐色。20は、M字凸帯に両縁にヘラ工具による線刻を刻んだ大型甕の胸部片である。胎土はやや粗く、小～粗砂粒を少量含み、橙色。21は、倒卵形の胸部中位に1条の三角凸帯が巡る。調整は、外面がナデで凸带上にはハケ目が残る。内面は、押圧後にハケ目～ナデ。胎土には、小～粗砂粒を含み、黄橙褐色。22は、ヘラ先工具で線刻した1条の「コ」字凸帯が巡る。外面は凸带上がやや細かいハケ目、凸帶下が粗いタテハケ目で下半部はナデ消している。内面は、粗いナナメ～ヨコハケ目。胎土は緻密で、小砂粒を含む。黄橙褐色。23は、卵形の胸部中位に上縁を平滑にした三角凸帯が巡る。外面は、凸帶下がタテハケ目で凸带上には暗文状の施文がある。内面は、押圧後にタテハケ目調整。胎土は緻密で、若干量の小砂粒を含む。黒褐色～淡黄橙色。24は、肉厚の丸底甕である。内面は押圧後に粗いハケ目、外面は下半がやや細かいタテハケ目、中位は粗いタテハケ目調整。胎土はやや緻密で、小～中砂粒を含み、灰黄褐色。25

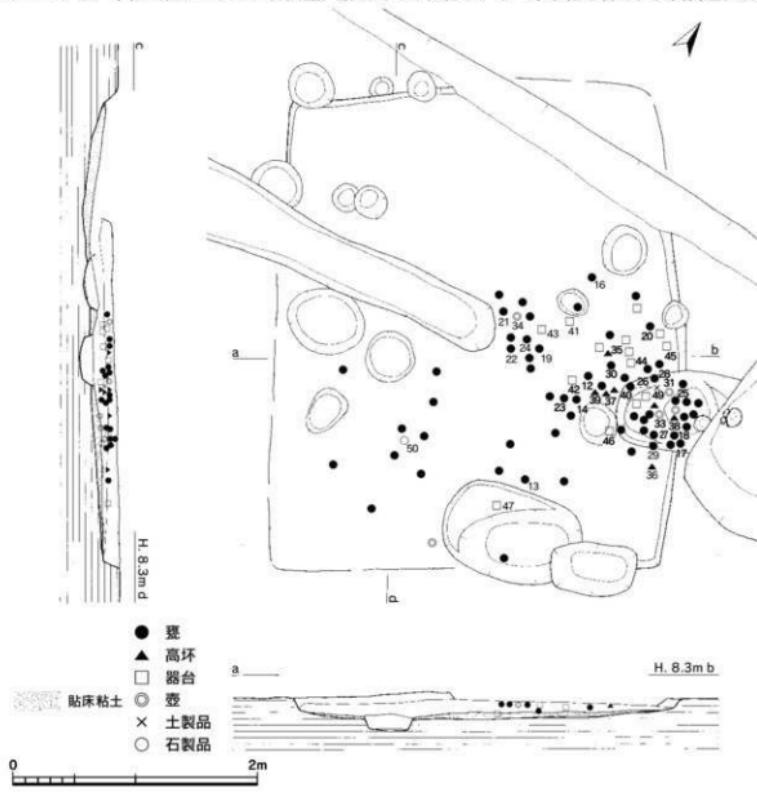


Fig.19 2号住居実測図 (1 / 40)

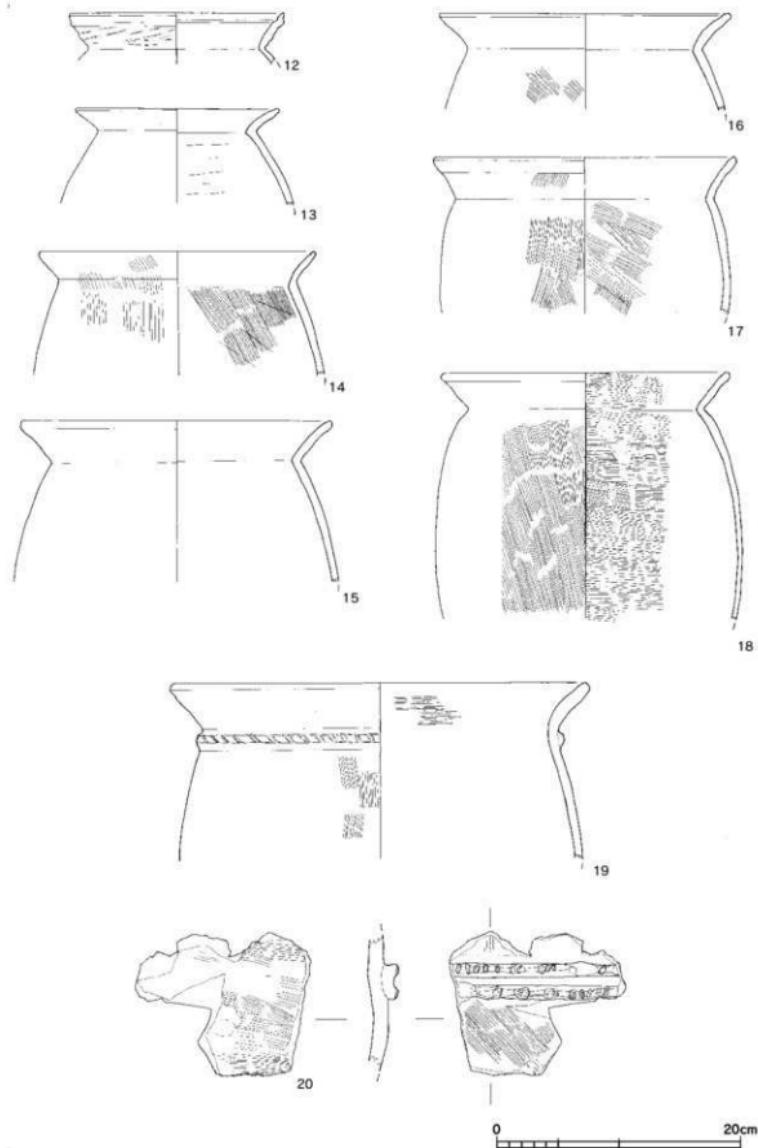


Fig.20 2号住居出土遺物実測図 1 (1/4)

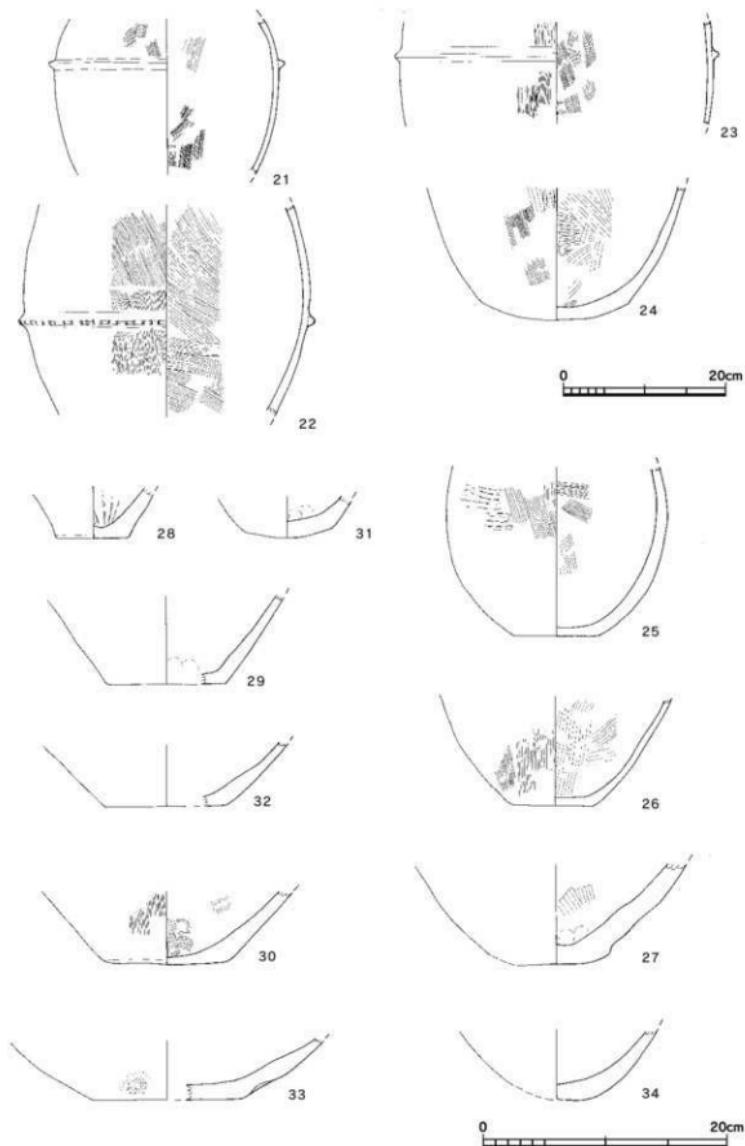


Fig.21 2号住居出土遺物実測図2 (1/4・1/6)

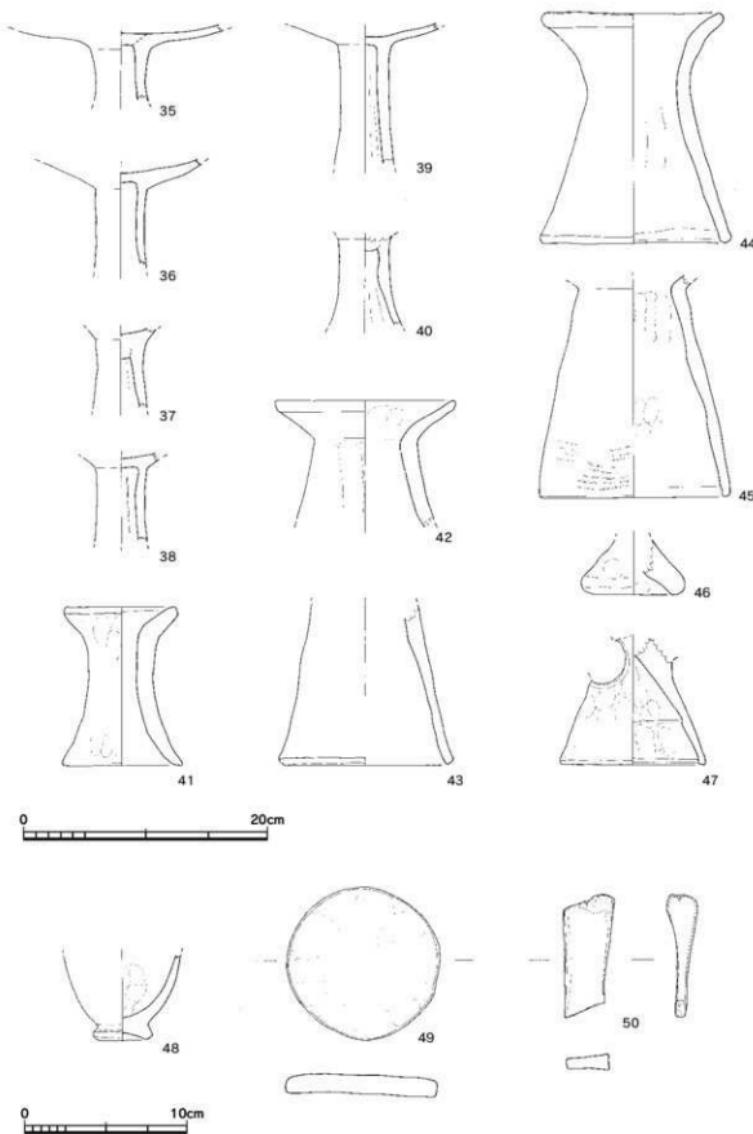


Fig.22 2号住居出土遺物実測図3 (1/3・1/4)

~30は、平底壺である。25は、底径が7cmで胴部は長球形をなす。調整は、外面がナデで中位には叩き後にタテハケ目を重ねている。内面は、押圧後にハケ目～ナデ。胎土はやや粗く、小～中砂粒を含む。にぶい黄褐色～黒色。26は、底径が6.6cmで胴部は倒卵形をなそう。調整は、内面が押圧後に粗いハケ目、外面はやや細かいタテハケ目。胎土はやや粗く、小砂粒を多く含む。黄褐色。27は、丸底気味で器内は厚い。外面はナデ、内面は押圧後にナデ仕上げであるが、一部にハケ目が残る。緻密な胎土には小砂粒を含む。淡黄橙色。28は、底径が6cm。外面はナデ、内面は押圧ナデにヘラ工具痕が残る。胎土には小～粗砂粒を含み、橙褐色。29は、底径が9.6cm。内面は指頭押圧後にナデ調整。胎土は粗く、小～粗砂粒を多く含む。橙褐色～淡橙色。30は、底径が10.2cmで、底部は薄く、胴部下半は肉厚である。外面はハケ目後にナデ、内面は押圧後にハケ目調整。胎土は良質で、小～中砂粒を含み、黄橙色。

31～34は、壺である。31・34は、器肉の厚い丸底で外面はナデ、内面は押圧ナデ調整。胎土はやや粗く、細～中砂粒を含む。色調は、31が淡赤橙色、34は淡黄橙色。32・33は、平底壺である。32は底径が10cm。胎土には細～中砂粒を含み、にぶい黄橙色。33は肉厚で、底径は12.2cm。いずれも外面はナデ、内面は押圧ナデ調整。胎土はやや粗く、小～中砂粒を多く含む。橙褐色。

35～40は高杯である。脚部は、細長くラッパ状にのびる。杯部は、内弯する体部が内面で屈曲して外反する口縁部が付こう。調整は、杯部と脚外側が丁寧なナデ、脚内面は粗いナデで絞り痕を残すものがある。胎土は良質で、細～中砂粒を含み、焼成は良好。色調は、淡黄橙色～淡黄褐色。

41～46は器台である。41は、口径が9.4cm、底径が10cm、器高は13cm。受け部は、大きく開き、据部は緩やかに外反する。調整は、指頭押圧後にナデ。やや粗い胎土には、小～中砂粒を多く含み、色調は橙褐色。42は、口径が14.8cm。受け部は大きく外反し、平坦に整えた外唇は上方に小さく摘み上げている。胎土はやや緻密で、少量の小砂粒を含む。灰褐色。43は、底径が14.4cm。据部はストレートに延び、端部は上方に跳ね上げる。緻密な胎土には、小～中砂粒を含む。にぶい橙褐色。44は、口径が15cm、底径が15.8cm。器高は19cm。受け部は、短く緩やかに外反し、据部はストレートに開く。受け部から体部状半がヨコナデのほかは、押圧後にナデ調整。胎土は粗く、小～中砂粒を含む。にぶい黄褐色。45は、底径が16cm。体部はストレートに延び、受け部は大きく屈曲して外反する。据部の内面は、浅く凹線状の窪みがある。調整は、押圧ナデで、据部には叩き痕が認められる。胎土はやや緻密で、小砂粒と赤鉄鉱片を含む。にぶい橙褐色～灰褐色。46は、底径が8.5cmの小型器台である。脚部は、肉厚で低い。胎土は緻密で、小砂粒をわずかに含む。淡橙褐色。

47は、底径が12cmの支脚形土器である。脚部は内弯気味の開き、脚裾は内側に小さく摘み出す。内面の中位には緩やかに屈曲した段を作る。脚上縁には基部径が3.5cmほどの指が外上方に向かって2本延びていたものと思われる。調整は、指頭押圧ナデ。胎土はやや緻密で、小砂粒を含み、焼成は良好。橙褐色～茶褐色。

48は、底径が3.6cmのミニチュア土器である。底部は小さく外方に摘み出して高台状をなす。調整は、指頭押圧後にナデ。胎土は緻密で、小砂粒をわずかに含み、焼成は良好。淡黄橙色。

49は、直径が9.3cm、厚さが0.7～0.9cmの土製円盤で使途は不明。調整は、押圧ナデによる手捏ねで、やや上反りに成形している。胎土には細～中砂粒を多く含み、くすんだ淡黄橙色である。

50は、長さが7.5cm + a、幅が2.5～3.1cm、厚さが0.46～1.09cmの粘板岩質の仕上げ砥である。砥面は表裏面と両側面の4面で、良く研ぎ込まれている。

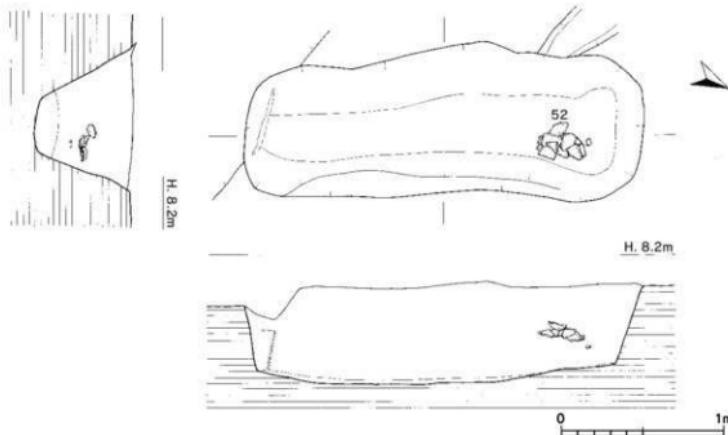


Fig.23 53号土壤墓実測図 (1 / 30)

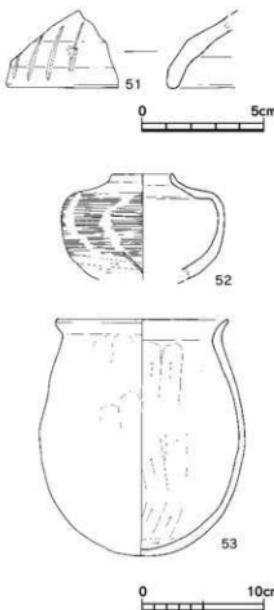
2) 土壙墓 (SR)

53号土壙墓 SR-53

(Fig. 23・24 PL. 7・11)

53号土壙墓は、調査区のほぼ中央部に位置し、南小口壁は4・5号住居の壁面を切っている。平面形は、長軸が244cm、短軸が88cmのやや不整な隅丸長方形プランを呈し、主軸方位をN-12°-Wとする。壁面は、緩やかに立ち上がり、壁高は60cm。壙床は、北小口壁側が35cmほど水平で、そこから南は8cmほどの比高差で凹レンズ状に浅く窪んでいる。断面形は浅い舟底状をなしている。北小口壁側のフラット面上から須恵器小壺と土師器甕片がまとまって出土しており、このフラット面上を頭位として埋納した可能性も十分に考えられる。また、南小口壁には幅が2~3cmほどの溝状の窪みに灰色粘土が薄く帶状に堆積しており、板材の挿入痕の可能性も想起される。覆土は、暗茶~茶褐色土の單一層である。遺物は、須恵器壺片や土師器甕片のはかに混入した弥生土器がわずかに出土した。

51は、須恵器壺蓋である。口縁部は、体部上位の二ヶ所で小さく屈曲した後に、垂直に摘み出すように外傾する。調整は、口縁部と

Fig.24 53号土壤墓出土遺物実測図
(1 / 2・1 / 4)

内面はヨコナデ、天井部はヘラケズリで口縁部下には4筋のヘラ描きの線刻がある。胎土は、やや粗く小砂粒を多く含む。焼成は良好。色調は灰色。52は、口径が5cmの須恵器短頸壺である。体部は玉葱状の偏球形をなし、口縁部は短く内傾する。調整は、口縁部と内面がヨコナデ、胴部中位はカキ目、胴部下半は左から右へのヘラケズリ。胎土は緻密で、細砂粒をわずかに含み、焼成は堅致。色調は灰褐色。53は、土師器甕である。口径は14.2cm、器高は19.4cm。口縁部は、短く「く」字状に外反し、胴部は下膨れの長胴形をなす。調整は、口縁部がヨコナデ、胴部は外面がナデ仕上げ、内面は下から上へのヘラケズリ、内底面は指頭押圧ナデ。胎土はやや緻密で、小～粗砂粒を含み、焼成は良好。色調は、赤褐色～茶褐色。

3) 土壙 (SK)

99号土壙 SK-99 (Fig. 28・29 PL. 7・11)

99号土壙は、調査区の北東隅にあり、東壁は100号土壙墓に切られているが、西壁は2号住居の東壁を切っている。平面形は、短軸が68cmの長方形プランをなし、長軸は120cmほどになろうか。壁面は緩やかに立ち上がり、深さは61cmで両小口側には壙底から35cm上に小さな半月形のフラット面を作る。これが土壙の一部か柱穴との重複は判然としない。壙底は、凹レンズ状で断面形は舟底状をなす。覆土は、黄褐色粘土粒を含む茶～暗茶褐色土で、遺物は、土師器片がわずかに出土した。

59は、底径が7.4cmの土師器甕である。胴部は卵形をなす。調整は、内面が押圧ナデ、外面は下半がケズリ状の粗いハケ目、中位はハケ目後にナデ。胎土は粗く、小～粗砂粒を含み、淡黄褐色。

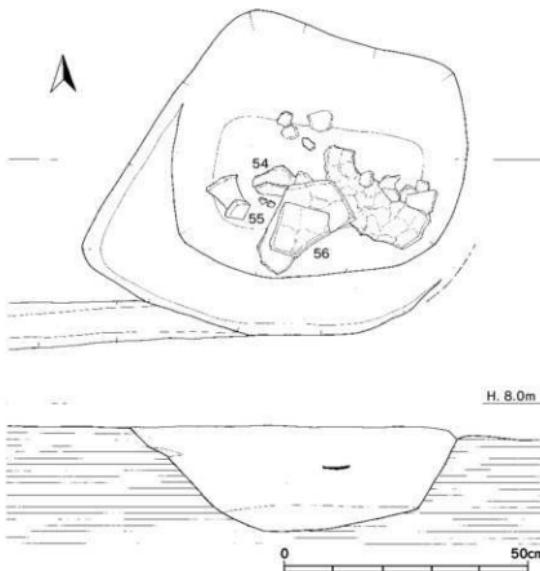


Fig. 25 87号ピット実測図 (1 / 10)

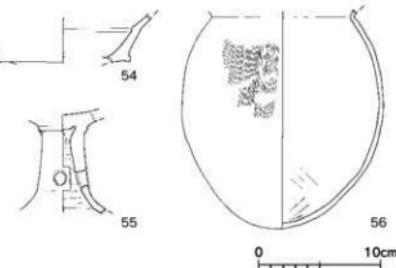


Fig. 26 87号ピット出土遺物実測図 (1 / 4)

4) ピット (SP)

87号ピット SP-87 (Fig. 25・26 PL. 8・11)

87号ピットは、調査区中央部の東寄りにあるピットで、3号住居の南壁に接して位置している。すぐ南には80号土壙墓がある。平面形は、長軸が67cm、短軸が65cmの不整形を呈する。壁面は緩やかに立ち上がり、深さは21cm。底面は、浅い凹レンズ状に窪み、断面形は逆台形をなす。ピット内からは、土師器高杯や甕片が比較的まとまって出土した。

54は、有段高杯の坏片である。坏下端部は凸帯状の段が付き、口縁部はストレートに外反する。内面は中程で小さく屈曲して垂直に立ち上がった後に口縁部へと続く。胎土はやや緻密で、小～中砂粒を含み、焼成は良好。橙色。55は、土師器高杯の脚で、脚中位に円孔を穿っている。脚内面はヘラケズリ、外面と坏部はナデ調整。胎土は粗く、小～粗砂粒を含み、色調は赤橙色。56は、土師器甕である。胴部は倒卵形をなし、口縁部は「く」字状に外反する。外面はハケ目後にナデ、内面はヘラケズリ後にナデ調整。胎土はやや緻密で、小砂粒のほかに赤鉄鉱塊片と黒色粒子を含む。焼成は良好。

4. 中世の調査

中世の遺構は、土壙墓2基と大溝1条を検出したのみで全体的な拡がりは明らかではない。このうち溝は、調査区の南縁を緩やかに弧を描くように開削されている。構造的にもやや膨らむ北側が緩やかな傾斜を保ちながら掘り込まれているのに対して、南側は急峻に立ち上がり、地山高もやや高くなっている。また、2基の土壙墓は、調査区の東に寄って立地しているが、相互間の繋がりは稀薄で墳墓域の拡がりも把握できない。

1) 土壙墓 (SR)

80号土壙墓 SR-80

(Fig. 28 PL. 11)

80号土壙墓は、調査区の南東部に位置し、すぐ西には5号住居がある。上縁は62号溝に因って削平されて南壁は低くなっている。平面形は、長軸が220cm、短軸が78cmの隅丸的な長方形プランを呈し、主軸方位はN-62°-Eにとる。壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。壙床は、西小口壁側はフラットで、中央部は緩やかに東小口へ向かって緩傾斜し、東小口側は再びフラットになる。この東小口壁側には浅い段が付き、北側壁側に浅い溝状の抉り込みが見られることから棺材を打設した可能性が考えられる。また、壙床の傾斜を勘案すると西に頭位をとった可能性が想起されよう。壙床幅は、45cm。覆土は、茶褐色土の單一層で、遺物は、西小口壁際から完形の土師器小皿が出土したほかに弥生土器片や土師器片、須恵

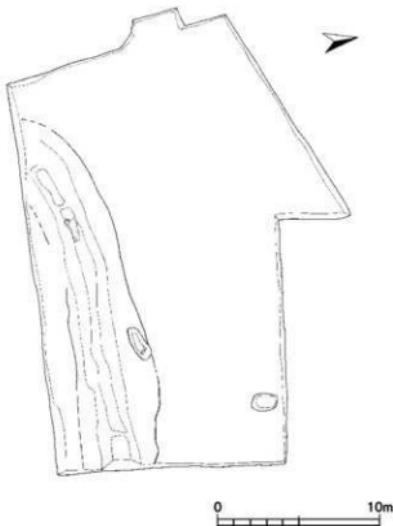


Fig.27 中世の遺構配置図 (1 / 300)

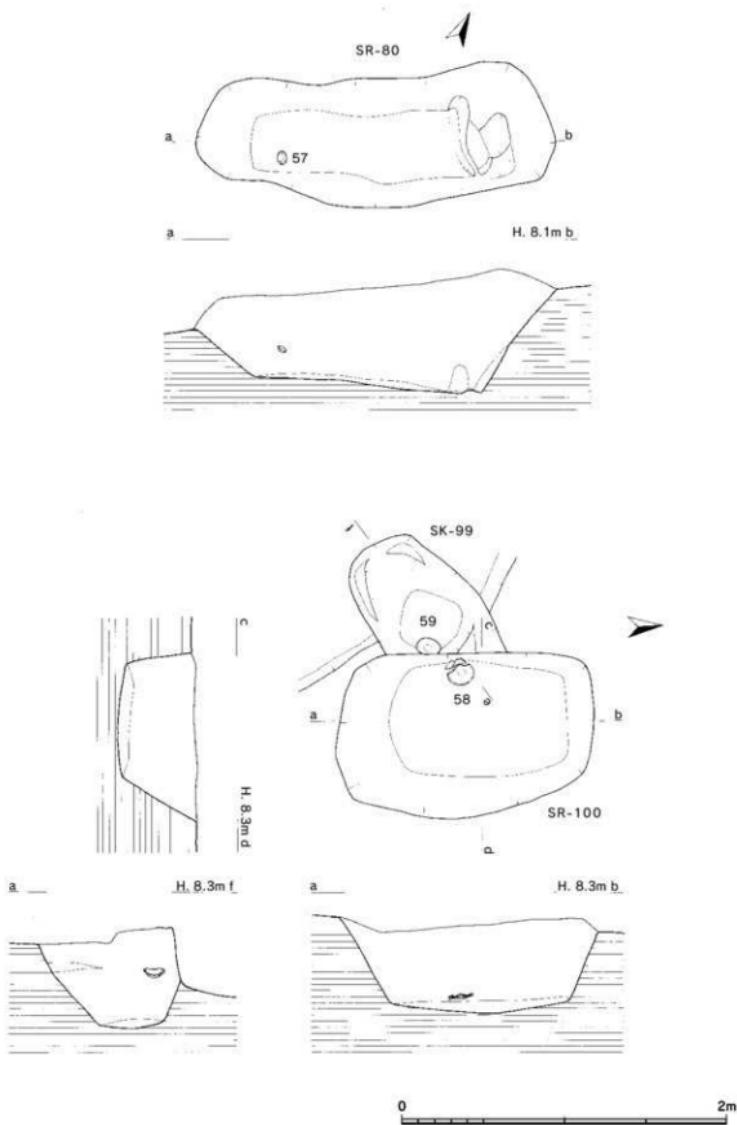


Fig.28 80・100号土壤墓・99号土壤実測図 (1 / 30)

器片がわずかに出土した。

57は、口径が7.7cm、底径が5.5cm、器高が1.6cmの土師器小皿である。口縁部はストレートに外反し、端部は細く摘み上げている。胎土は緻密で、小～中砂粒を含み、焼成は良好。色調は淡黄橙色。

100号土壙墓 SR-100 (Fig. 28 PL. 7・11)

100号土壙墓は、調査区の北東隅に位置し、西側壁は、99号土壙の東壁を切っている。また、すぐ西には、2号住居が隣接している。平面形は、長軸が156cm、短軸が102cmの長方形プランを呈し、N-3°-Eに主軸方位をとる。壁面は、緩やかに立ち上がり、壁高は58cmを測る。墳床は、中央部が凹レンズ状に浅く窪み、断面形は逆台形をなす。覆土は、上～中層は暗茶灰色土、下層は茶褐色土である。遺物は、西側壁際の墳床に完形の李朝白磁碗が副葬されていた。

58は、口径が15.5cm、高台径が5.6cm、器高が4.6cmの季朝白磁碗である。胎土は緻密でやや軟質。碗部は、灰褐色釉を全面に施釉している。16世紀の所産。

2) 溝 (SD)

62号溝 SD-62 (Fig. 30・31 PL. 8)

62号溝は、調査区の南縁を東西流する幅広の溝で、中央部の北岸では4・5号住居を、南岸では63・64号住居を切っている。溝幅は、400～500cmで、壁面は上縁から比高差が50cmほど緩やかに傾斜して屈曲線を作り、そこから溝底に向かって急峻に落ちて込んでいく。溝底の標高は、6.7

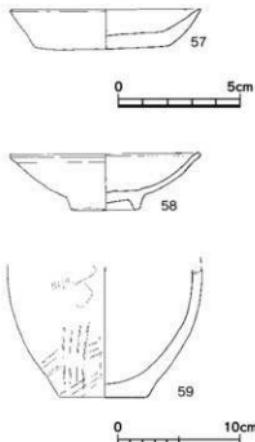


Fig.29 80・100号土壙墓、
99号土壙出土遺物実測図
(1/2・1/4)

凡例

1. 客土層1: ロームブロック、炭ガラ混入
2. 客土層2: 炭ガラ混入
3. 暗黃茶褐色土
4. 明黃褐色土: ブロック層、炭片少量混入
5. 明黃褐色土: ブロック層
6. 黄褐色土: ロームブロック多く混入
7. 淡明黃褐色土: ロームブロック+
8. 黄茶褐色土: ロームブロック+
9. 黄茶褐色土: ロームブロック混入
10. 黄茶褐色土: (4)層に類似
11. 暗黃褐色土: ローム粒多混入、茶褐色土混入
12. 暗灰褐色粘土: シルト質
13. 暗茶褐色土: ローム粒比較的多く混入
14. 暗茶褐色土: (13)層に類似、ローム粒少なく茶褐色土多混入
15. 暗灰黑色土: 粘土質
16. 暗灰茶褐色土: 粘土質
17. 暗茶褐色土: 粘土質で灰黑色土多混入

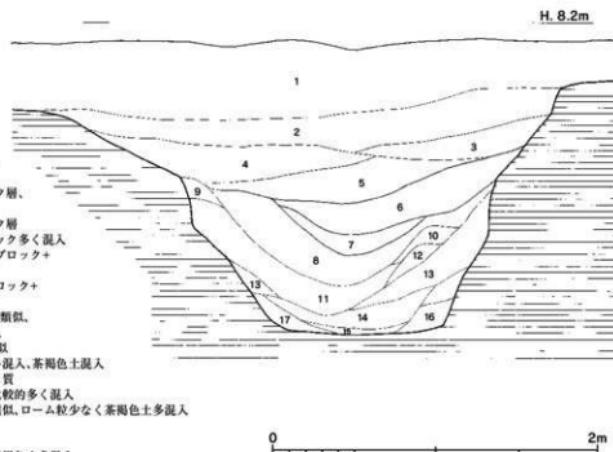


Fig.30 62号溝土層断面実測図 (1/30)

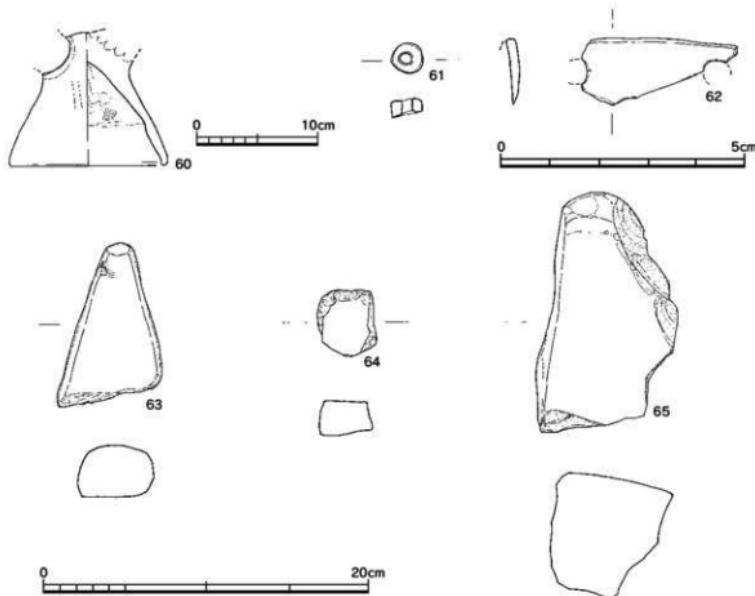


Fig.31 そのほかの遺構出土遺物実測図 (1／1・1／3・1／4)

~6.8mで、東端は-25cm、西端は-15cmほど掘り下げた段が付き、上縁は南側がやや高くなっている。溝の西端は、南に向かって緩やかなカーブを描くように弧状に延びているが、戦中の防空壕によって途切れている。遺物は、弥生土器や土師器、須恵器のほかに陶磁器片が出土した。

63は、三角柱状の敲打工具か。天井部の左側縁には3mm径の円孔を穿ちかけている。砂岩質。

5. そのほかの遺構と包含層の遺物 (Fig. 31 PL. 11)

調査では、各期の竪穴状居や掘立柱建物跡、土壙墓などを検出したほかに柱痕跡を残しながらもひとつの建物として捉えられなかった柱穴が多数ある。また、地山上には、薄い遺物包含層が確認されている。これらの柱穴や遺物包含層からも石庖丁片や砥石などの遺物が出土している。

62・64・65はピットより出土した。62は、40号ピット出土の石庖丁片で、背に沿って5mm径の組通し孔を2.5cmの間を置いて2孔穿っている。輝緑凝灰岩製。

64・65は、砂岩質の砥石片である。65は33号ピット出土の粗砥で、砥面は表裏面と側縁の3面であるが、欠失した側縁にも砥面があったと思われる。64は、90号ピット出土の中砥で、長さは4.07cm+a、幅は3.51cm+a、厚さは1.57~2.19cm。砥面は、表裏の2面に残っている。60・61は包含層から出土した。60は、底径が13cmの脚形土器である。脚部は内湾気味の開き、脚裾は内側に小さく摘み出している。脚上縁には基部径が3.5cmほどの指が外上方に向かって2本伸びていたものと思われる。調整は、指頭押圧ナデ。胎土はやや緻密で、小砂粒を含み、焼成は良好。色調は橙~茶褐色。61は、直径が6.9mmの滑石製白玉で、真ん中に2.8~3.7mm径の円孔を穿っている。

III. おわりに

第139次調査では、弥生時代後期から古墳時代および中世の堅穴住居や掘立柱建物、甕棺墓、土壙墓、土壙のはほかに溝造構と柱穴を検出した。しかし、総面積が400,000m²におよぶ広大な遺跡の中で、わずか針の穴ほどの狭小な調査範囲ではその成果が直ちに遺跡の性格や機能を物語っているとは云い難いが、周辺の調査成果を勘案して今後の参考としたい。

はじめに時期的には、おおむね4期に区分され、内容的には堅穴住居や掘立柱建物、井戸などの集落遺構と土壙墓などの墳墓遺構がある。まず、集落域を構成する堅穴住居は、弥生時代後期のもの（3~5・63・64号住居）と古墳時代初めのもの（2号住居）の2時期に分けられる。このうち弥生時代後期の堅穴住居4棟（4・5・63・64号住居）は、中世の62号溝を挟んで4棟が互いに切り合って比較的短時間のうちに建て替えが繰り返されたことが想起される。一方、調査区の北東隅にある1棟（3号住居）は、古墳時代初めの庄内期の堅穴住居（2号住居）と重複している。この両者は、いずれも床面まで削平が及んでいるために遺物の混乱が見られるが、前代から引き続いて連続的に宮村されたと考えて差し支えあるまい。また、調査区の西隅では、堅穴住居とやや離れて1棟+aの掘立柱建物が検出されており、一體的に機能していたと考えられる。ここで特筆すべきは、2号住居から出土した支脚形土器（47）と87号ピットから出土した有段高坏（54）である。このうち支脚形土器は、伊予地方を中心に分布するもので市内の吉塚遺跡でも出土している。また、有段高坏は、安芸地方の墳墓等から出土する古墳時代初めの布留期に属するものである。これらの土器は、いずれも瀬戸内海西岸の海を挟んで対峙する地域からの搬入と考えられ、両地域との交流を示唆するものである。

次に、この堅穴住居の周りには、1基の小児甕棺墓と3基の土壙墓がある。小児甕棺墓（1号甕棺墓）は、3号住居と重複しておりその前後は判断しがたいが、概して墳墓群が後出するものと推考される。この1号甕棺墓の中には、別個体の小児墓と考えられる甕が転入しており、周辺域に該期の甕棺墓があつたことを窺わせる。また、土壙墓は、副葬遺物がなく明確な時期は決しがたいが、土壙墓のうちの1基（7号土壙墓）は、掘立柱建物（101号建物）よりも新しく、掘立柱建物が堅穴住居と一緒にとして機能していたと考えれば、土壙墓は、後期末に甕棺墓と併せて造墓されていたことが窺われる。一方で、本調査区の北20m余りの距離にある第4次調査区では、前期末の甕棺墓が検出されていることなどを勘案すると周辺域一帯は連続的に墓域としての空間を保っていたものと考えられる。次の古墳時代は、前述した古墳時代初めの堅穴住居と中期の土壙墓の2時期が、単独で立地する土壙墓（53号土壙墓）をもってして墓域の云々を論じることはできない。

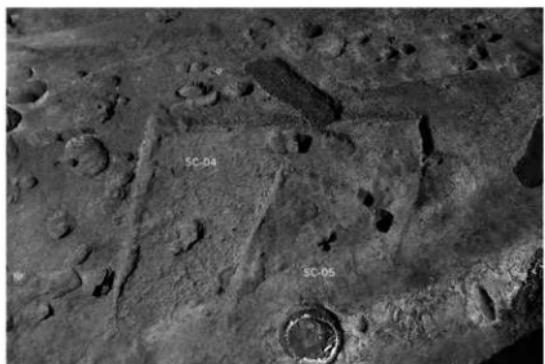
そして最後には、中世の土壙墓と大溝がある。土壙墓は、2基（80・100号土壙墓）で古墳時代の土壙墓と同様にその括がりは定かではない。このうちの1基（100号土壙墓）には、季朝の白磁碗が副葬されており、輸入された舶載品を所有し得た在地勢力の存否を窺わせる。更に、調査区の南縁を西にむかって弧状に掘り込まれた大溝は、明らかに防衛的施設で、その南側の内郭には居館施設があったものと考えられる。この大溝の南への括がりは未確認であり、筑紫通りを挟んだ第73次調査区でも確認されておらず、その規模は明らかでない。しかし、この期の溝は那珂遺跡群内で幾筋も確認されており、那珂丘陵上には、一定規模の居館を構える小名の在地勢力が幾つか存在していたことは明らかである。このように本調査区を概観すると、弥生時代後期から古墳時代初めには、集落域と墳墓域が重なるように営まれるが、北に対峙する第4次調査区では、前期末の墳墓が営まれていることを鑑みると、集落域に伴って墓域も変遷する感が窺える。同時に、丘陵の尾根筋上に立地する那珂八幡古墳や東光寺剣塚古墳を境として丘陵の東西での集落域と墓域の展開を検討する必要があろう。



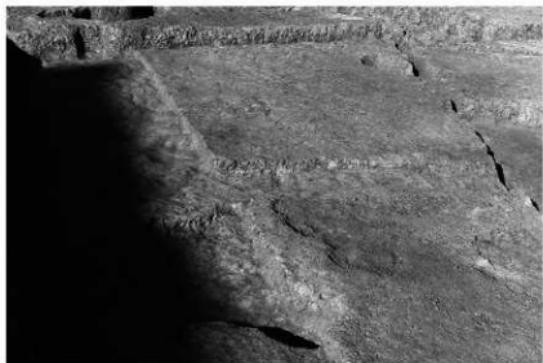
調査区全景（東から）



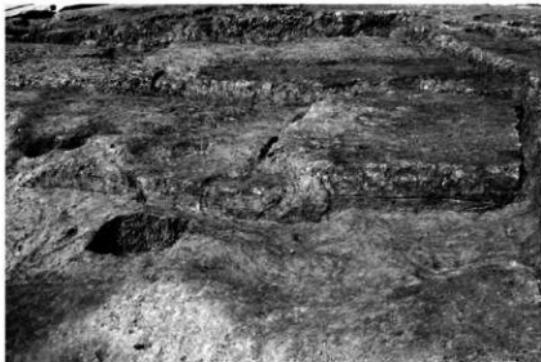
1) 2・3号住居貼床断面（南から）



2) 4・5号住居（南から）



3) 4号住居（南から）



1) 5号住居貼床断面（西から）



2) 5号住居遺物出土状況（西から）



3) 63・64号住居（北から）



1) 8号井戸（南から）



2) 8号井戸南北断面（南から）



1) 61号井戸（東から）



2) 61号井戸南北断面（東から）



1) 1号甕棺墓（西から）



2) 1号甕棺墓挿入状況（南から）



3) 6号土壙墓（南から）



1) 7号土壤墓（北から）



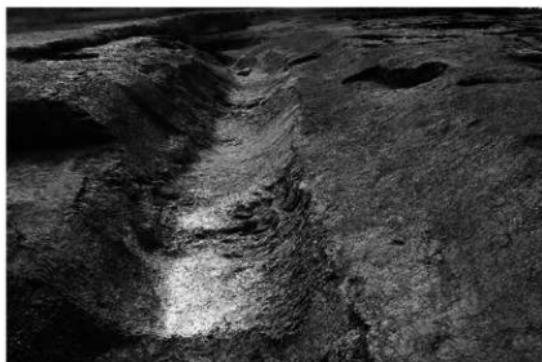
2) 53号土壤墓（東から）



3) 99号土壤・100号土壤墓（西から）



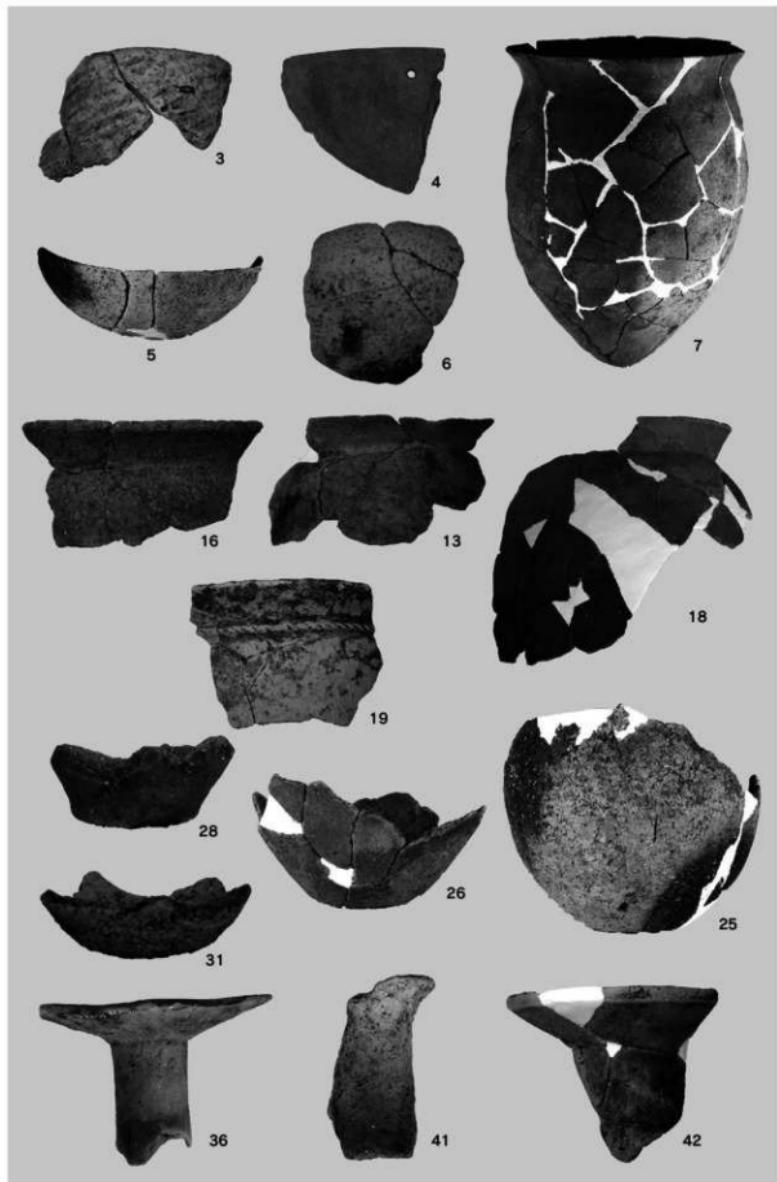
1) 87号ピット（北から）



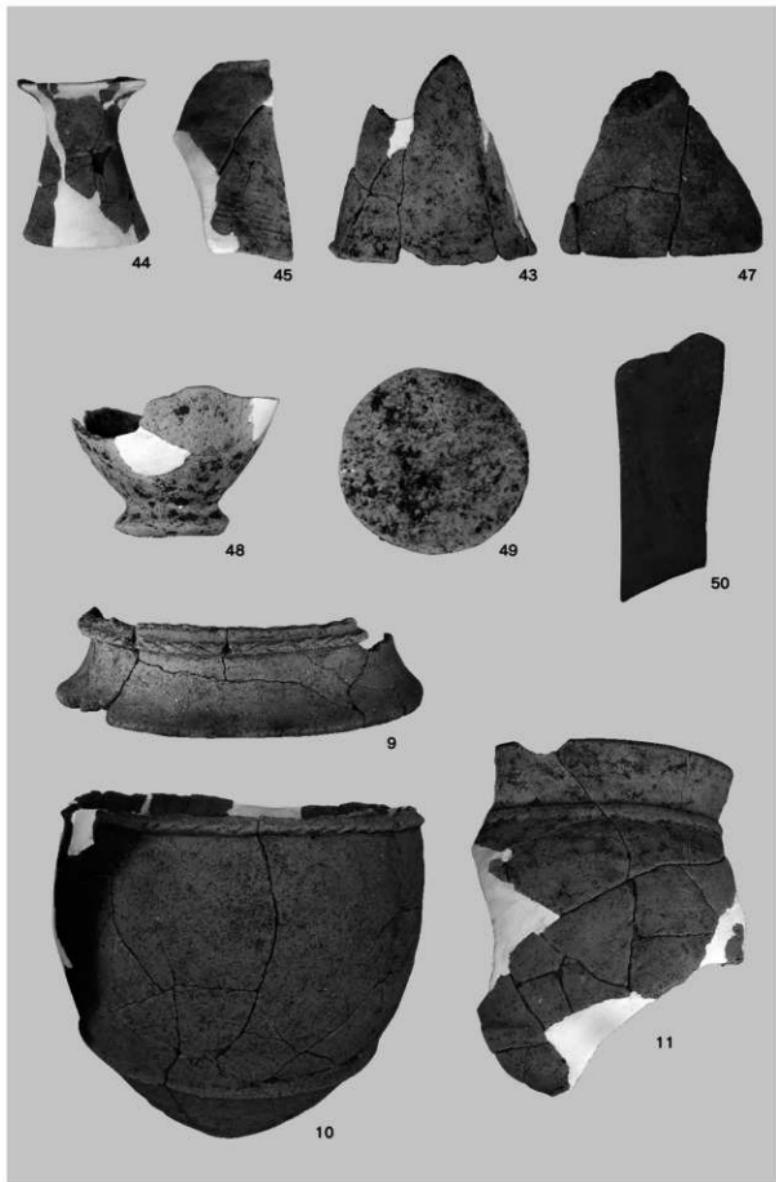
2) 62号溝（東から）



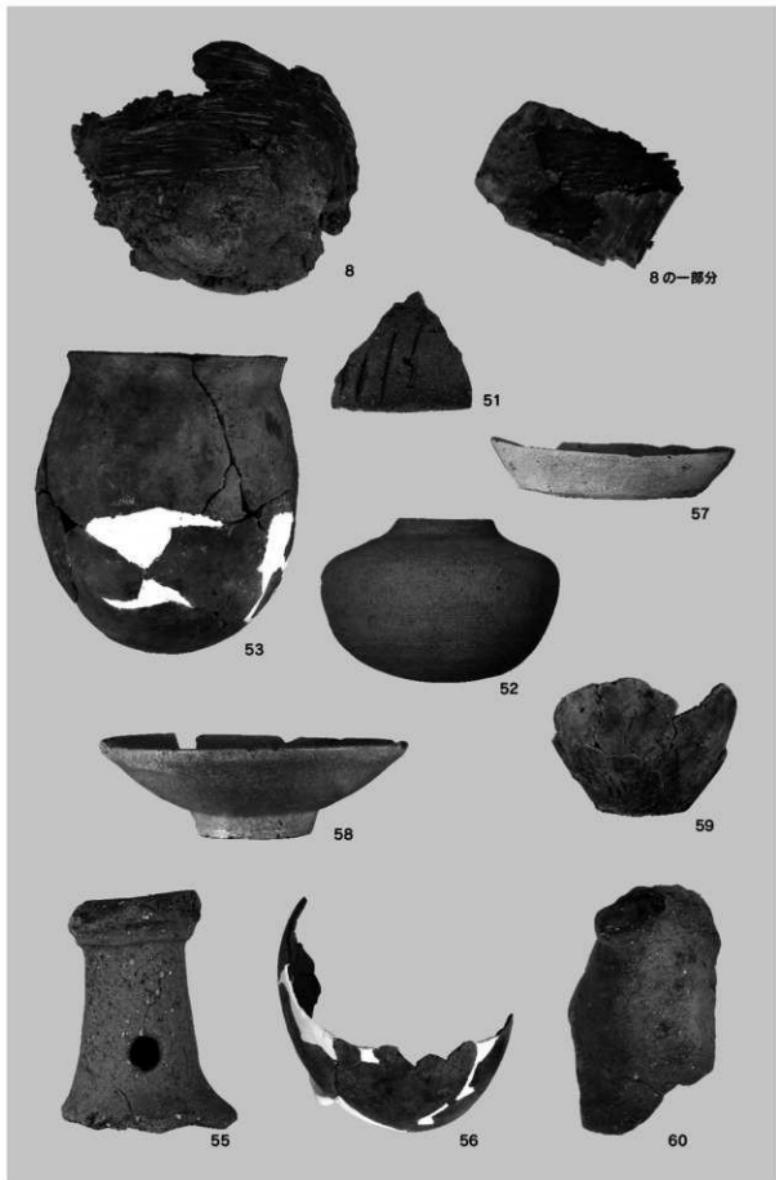
3) 62号溝東壁土層断面（西から）



出土遺物 1 (縮尺不同)



出土遺物 2 (縮尺不同)



出土遺物 3 (縮尺不同)

報告書抄録

ふりがな	なか69							
書名	那珂69							
副書名	那珂遺跡群第139次調査報告							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1231集							
編著者名	小林義彦							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号							
発行年月日	2014年3月24日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
那珂遺跡群 第139次調査	福岡市博多区 那珂1丁目333-1、 333-2	市町村	遺跡番号	33° 34° 18°	130° 26° 19°	20120820 ～ 20121016	414 m ²	記録保存 調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項	
那珂遺跡群 第139次	集落 墓地	弥生時代～中世	堅穴住居、井戸、土壙墓、 甕棺、墓、土壙、溝	弥生土器、石器、 木器、白磁碗				
要約	<p>那珂遺跡群は、福岡平野を北流する那珂川と御笠川に挟まれて長くのびる春日丘陵の北部に位置し、北には比恵遺跡群が、南には五十川遺跡や井尻B遺跡が鞍部状の開析谷を隔てて続いている。第139次調査区は、この那珂遺跡群の中央部の東縁に位置し、蛇行しながら北へ流れを変える御笠川の西岸にむかって緩やかに傾斜してゆくその緩斜面上に立地している。発掘調査では、弥生時代後期の堅穴住居や掘立柱建物、井戸、土壙墓、甕棺墓と古墳時代初めの堅穴住居や中期の土壙墓のほかに中世の土壙墓や居館に伴うと考えられる大溝を検出した。このうち、弥生時代後期から古墳時代初めの堅穴住居は、建て替えを繰り返しながら營村されている。また、甕棺墓や土壙墓は、集落域に伴うが如く造墓されたものと思われる。また、中世の大溝は、規模的に防衛的機能を有したと考えられ、その南側には主郭をなす居館が抜がっていたことが想起される。この期の大溝は、那珂遺跡群内に幾筋もあり、丘陵上には、ある一定規模の居館を構えた在地勢力の存否が窺い知れる。</p>							

那珂 69

- 那珂遺跡群第139次調査報告 -
福岡市埋蔵文化財調査報告第1231集

2014年(平成26年)3月24日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1
印刷 高松印刷有限会社